四つとせ寄りてお弓は立上り袖にあまりし血の涙。
五つとせ何時までこうして居たとても爺さや嬶さの顔見ない。
六つとせ無理〳〵結んだ腹帶を解いて下んせ十郎兵衛。
七つとせ泣きなき來るのは我娘名のらず返すは胸騷ぐ。
八つとせ山澤越えて澤越えて尋ねて來るのは我娘。
九つとせこゝで會はねど何處で會ふ極樂淨土の眞中で。
十とせ德島川原の十郎兵衛、我兒を殺すは情けない。

●羽子唄（山形市）

○門塀紋造り木綿の絲は絹より細い、細けりやむめろ、柳の下に石燈籠立つて、砂泥敷いて、ぐつと廻て一町の。

●獨樂唄（同上）

○一に賴光、二に金時、三に貞滿、四に季武、五に保昌、六に義經、七に四王天八に八幡太郎、九に熊谷、十に重太郎。

●寒念佛の歌（鶴岡地方）

○稻荷樣の鳥居の勸化よ、我々からになりませぬ、どうぞ志し御手の內、ナムアミダ〳〵。

●同題目の歌（同上）

○あはれなるかな石童丸、草を分けつゝ巖に登り、父をたづねて高野の山に、ナムミョホウレンゲ經〳〵。

●雜謠（置賜郡）

○こんな月夜に提灯つけて、何んぼ蠟燭屋の娘でも。
○お月樣さへ夜遊びなさる、おらだ夜遊び無理はない。
○おらが寺の前な十六六角豆、後の文句は籠で通る。
○伊勢は津で持つ津は伊勢でもつ、尾張名古屋は城でもつ。
○行かうか出雲崎歸らうか新潟、こゝは思案の寺泊り。
○山で木の數、野で萱の數、後は野となれ山となれ。
○螢待て〳〵待たぬか螢、螢だまして文を讀む。
○來るか來ぬかと下上見れば、何の用もない野郎が來る。
○橋の欄干に片袖掛けて、月の光で文を讀む。
○踊り跳らば品よく見よく、品がよければ嫁に娶る。

○踊り見に來たか立見に來たか、此處は立見の場所じやない。

羽後國

●方言歌（秋田）

○秋田じやサイ、塞の上のサイ、御祭禮でサイ、歳々餅を歳々搗いて、歳々食つてサイ。

●秋田ことば（同上）

○秋田ことばに、子供に香物、お銚子こ持て來い、ばくまけ（嘘言つけ）だ。

●秋田の名物（同上）

○秋田の名物、八森鰰、男鹿では男鹿ふりこ、能代春慶、檜山なつと、大館曲わつぱア、トロンドン〳〵、ドツコイナア、ヨーイヤアナー。

●追分節

○西は追分、東は關所、關所越えれば茶屋の町。

●馬方唄

○二兩に買た馬十兩に賣れば、八兩儲けた初馬喰。

○辛いものだよ馬喰衆の夜路、夜は轡の音ばかり、さつさと歩びやがれ、畜生奴石に三升のあめだの食粮。

●秋田音頭

○烏帽子直垂立派に見せかけ天神樣のやうだ、ソレ〳〵嬶とねるときア矢張あゝして、立派でおしやじべか。

○戰爭このかた祿高增すとて今迄待ちたれど、ソレ〳〵待ち樣のわりせか、話ば

かりでけつそりつめられた。

○つめるもつめたし能くもつめたし、人々大くどき、ソレ〳〵、科なき頭の髪迄つめられそつくりいがあたま。

○向行く旦那さん襠高袴で米町かけの馬、ソレ〳〵、長州征伐水戸にえげたば家さめて泣きやアがつた。

○おら家の米櫃アペラボの性だか、非常に舌を出す、ソレ〳〵、朝食て晩ない米櫃アお輕で竈は由來之助。

○お前達聞てけせいふにも恥かし己家の人はまた、ソレ〳〵、酒こもばくつも、さつぱり出來ねで、そうして今朝戻た。

○日暮になると用向こしらへ毎晩かけ出し、ソレ〳〵、めない事だとあと附け見

たりば、宿コにこづばつた。

○あんまりゴシヤケて裏から廻つて隙見をして見たば、ソレ〳〵、かやきコ養たて、後家コと同意で痴話まけまくらてだ。

○御代がかはりて明治になつたりば、不思議な事ばかり、ソレ〳〵、御父さん女郎買て御母さん學者で、息子は後世願。

○凡そ世界にテンボな人もあればあるものだ、ソレ〳〵、八郎潟から男鹿山くづして蒸汽入れるとよ。

○その山崩して蒸汽入れるも隨分よけれども、ソレ〳〵、何につけても會社が無ければ其山くづれない。

●雲州拳（酒田）

○酒田名物後家や菰(私窩子の事)、キタコラサア、キタコラサア、キタコラサア、キタコラサア
一本ゞめたア、キタコラサア相ジアネエ、キタコラドン〳〵惡いネエ。

●おばこ節

○おばこ心持や池の端の蓮の葉の溜水、少し觸るでど、ころ〳〵轉ろんで、そま(そまは那時といふこと)落ぢる、コバエデ〳〵。

○おばこ來るかアと田甫の外れまで出て見たば、おばこ來もせで用の無い莨賣なんど觸れて來るコバエデ〳〵。

●鎭守祭禮唄(大館)

○本年萬作、をさまで仕舞ば雨風、糞でもない、三百取られた、あげくの果には鼻迄もんがれたア。

●豆撒(北秋田郡荒瀬村)

○豆の皮奉賀奉賀〳〵、錢と金は飛で來へ、長蟲は寄るな。

●鳥追(同上)

○朝鳥ホヘ〳〵夜鳥ホヘ〳〵是は何處の鳥追だ、長者殿の鳥追だ、長者殿の園地に鳥の無園で米食ふ蟲と栗食蟲のあたま割て鹽付けて鹽俵さまくつり込んで佐渡島に追ひ流せ、弓矢も流れ凶餓地も流れて跡さ福はとんことまた。

●彼岸に佛を送る唄

○ぢいな(老爺樣)ばんはアな(老婆樣)明りに、團子を背負つて、杖こ突いて、往とうれやい〳〵。

●勸化(酒田)

○歸命頂禮、地藏菩薩、我子に命壽をたれ玉へ、なアむ、あみだーあぶつなむー
あみだーあぶつなむーあみだあぶつ。

●盆踊唄（秋田市）

○唄ひなされや、お唄ひなされ、唄で御嫌致が下りヤせぬ。
○聲の嗄れだも、身のやぢれだも、皆おのし(主)の爲ぢやもの。
○お月樣でさへ、夜遊びなさる、私の夜遊び無理でない。

●同（酒田）

○盆の踊り子は急がしものよ、襷かけねば踊られぬ。
○踊り踊らば三十まで踊れ、三十過ぎたら後生願へ。
○腰はシワイと柳小路、顏は微り櫻小路、嫌致の美いのは辨天小路、そこに私が

濱の町、町は荒町、芽出度いかすや小路。

●同（大館）

○から〳〵ずあ、とうでの、ねこあとまたあ、くちのなかこまあで、さあ、どう
よあいそなあゝい。
○じよすけ踊の始まる時になア、箆も杓子も、手につかアぬヨ。
○じよすあ、てゞあ、いゝかゞ、もたあぞイアなア、まなくあ、そこだアに、は
なまがりヨ。
○じよすけ〳〵と、よばる時ア、はゝがアきあうなあ、じよすけ、もこにけいて
ことアかけいだよ。

●動物の唄

○ほたァるほたる、彼方の粕あ甘くねャイ、此方の粕あ甘ンて、こちャア來い、こちャ來い。

○雀コや雀コ、なして(何故と)其處さ止つた、腹空きて止つた、腹空きたら田作れ田作れば汚れる、汚れたら洗へ、洗へば流れる、流がれたら葦の葉にたぐ付け、たぐ付けば手切れる、手切れたら麥の粉をくつ着けれ、くつ着ければ痛める、痛めたら寢えれ、寢れば鼠に引かれる、起きればお鷹に捉はれる。

●手鞠唄（酒田）

○とうこ通りやる小田原通りやる、小田原名主の中娘、色白で櫻色で、江戸先庄屋に貰れて、其庄屋は伊達な庄屋で着るもの何々着せまんしよ、絹やつむぎや金らんどん子に藍紫を七重亦八重かさねて染ておくのは紺屋さん紺屋ながらも染

てもおくに散して何々付けまんしと肩から裾まで雪をり牡丹に水にもまるゝ荒浪を、其荒浪どこへ流れるお辰が袂に流れこむ、其のたもとは廣い袂で、中で戻ればいや戻る〳〵。

○一もめ(多とい)ぶんど〳〵、二もめ掃けア〳〵、三もめさアさをんこて、四ンも め鹽背め鹽背め、五もめ縄絢へ縄絢へ、六もめ髪結へ〳〵、七もめ髪付々々、八もめもてまきもてまき、九もめ撫で付け〳〵、十もめつかめ、一度、二度、三度

○向ひの山で鳴く鳥は、雉子か鴨か、いなどりか、覗いて見たればおせん鳥、おせんこうせんかみのせん、かみのせんから何貰ろた、一に手箱二に鏡、三にさら〳〵帶貰ろた、帶を貰ろたどもまだ絎けねャエ、絎けて下されお姉さん、絎ける可いども帶の端に疵ついた。

○おてつがとくぢこうは大事の人で、はかり腰に差して都へ上る、其所でおみよはどんどゝ泣くよ、おみよなして泣く、なして泣く、せんまの櫛よ、櫛は要らない上方見たい、一里二里なら連れても行くべ、一の坂越え二の坂越えて、三の坂から突き落されて、醫者を呼ばうか目醫者を呼ぶか、醫者も目醫者も御無用で御座る、すばた薬は一分で二服、之を一服煎じて服めば、おみよもよかろ、腹の子もよかろ、其子生れて女の子なら、菰に包んで七處締めて、川へ流そかせんまの川へ、その子生れて男の子なら、寺に差上げ手習させて、筆は蒔筆白紙硯、書き上げさしよ師匠様に。

●子守唄

○ねんねや、ねんねや泣げばお山の、白犬ア來るよ、泣かねで、ねんねこせえで

ねんねこせえでアよ。

●向ひの婆たち（酒田）

○向ひの婆たちお茶呑みござい、鬼居て往かんない、しいしとぼッて、そんでも往かんない、鴉の羽吳れろか、餘まり黑くて往かんない、雀の羽吳れろか、餘り小さくて往かんない、鳶の羽吳れろか、餘り大きくて往かんない、新し船さ白帆かけて、誰どこ可愛い、誰様を可愛い、そんなら往かうや、井戸の端の茶碗缺片危ない。

●雜謡（男鹿島）

○聲はすれども姿は見えぬそれかあらぬかきりぐすす。

○愛は日に添ふ桐火桶人は思ひの下にたく。

○銀の柱に黄金のたるき錢と金とのこけらぶき、

陸前國

●方言歌（仙臺）

○奥州の仙臺名物、おらやんだ（己）、そうずしや（左樣デアル）そでがす、そでかいんか（ソウデハ有リマセヌカ）、ホウカイ、ちよつとがいまつ（何ヲ廢メテモ來レ）またでよがんべちや（來テモ宜シカラン）、いけすかねア（實ニ不好）、あねーあろ（彼ノ人）、ばけーあろ（不粹ナ人）。

●同（同上）

○いぐひすヤ（鶯）、初音ぶん出せ聞くべいに、あぜい（何故ニ）啼かない、無沙汰だんべい。

●米搗唄（仙臺）

○仙臺の宮城野の原の萩の花、咲き揃へ、錦に優る萩の花。

●糸繰唄（同）

○糸繰女を女房に持てば、切れる〳〵で氣が揉める。

○君は糸繰る車は回る、私恪氣で氣が回る。

●麥搗唄（同上）

○麥も搗けたし寢頃も來たし、あとの親達來ればよい。

●糸繰唄（志津川町）

○お前採る糸金天の御召、私が採る糸馬手綱。

●祝唄（仙臺市）

○桑折女郎衆と半田の山は、穴の中から金が出る。

○田舍なれども杉田の藥師、花の本宮めのもとに。

○さかなはさめと數の子はさむ、親は鰊で子はあさた。

●祝唄（志津川町）

○この家館が目出たい家族、四つの隅から黃金わく。

○一で嫁娶る、二で孫設ける、三で七つの倉をうつ。

●さんざ時雨（仙臺）

○さんざ時雨か、かやの〻雨か、音もせで來て、ぬれかゝる、しよふかいな。

●鹽釜甚句（鹽釜）

○鹽釜街道に白菊植ゑて、何をさく〳〵ありや便りさく、ハツトセ。

●馬方唄（志津川）

○よくも染めたや馬追ひの浴衣、肩に駈駒裾栗毛。

●えせん節（志津川町）

○氣仙沼に、名も無い鳥が、ひとしがへ、朝起きて舟子出せ漕げとさやづる。

○雨は降る、船場に笠を忘れて來た、笠も笠、お江戸で流行る伊達笠。

○出て見れば七曜の星は横になると、我夫は、いつ來て床に横になる。

●船囃子（石卷地方）

○出船の船に花が咲く、戻りの船に實が成る。

○嚴島のさがり松、何を欲くて手を出した、さがり小松を欲しさに手を出した。

●仙臺舟子投錨の俗謠

○はつ春のよきひをどりの、着長は皆な小櫻と成りぬべし、さて又夏は卯の花の垣根の水のあらひがい、秋になりての其色は、いつも軍に褐色の、紅葉に擬ふ錦皮、冬は雪氣の空はれて、胄の星の菊の座も、花やかにこそ威毛の、思ふ敵を打糸や、我が名を高く揚卷の、弓矢は嚢に納まりて、太刀は箱をば出さじと、富貴御世とぞなりにける。

●大漁唄（鹽釜）

○御祝事は、過ぎければ、おつぼの松をそよめかば、おほかりあれやお桝でお金を八石と〜〜〜〜、朝日のや、出船に、花が咲き揃へ、入船などには、土佐からお船の着くを見ろ。（一句毎にヨオイトコラサの懸聲を入る）

●海鼠曳

○なまこどの、御通りぢや、田鼠は内に居れ。

●かせどり

○明の方から、かせどりまゐた(參つた)延命の小槌、打手の小袋、もてまァーいた、けまへんか〳〵(けまへんは呉れませんかの略)

●年のはじめ

○濱の慣ひで、色こそ黒い、味は遠山の、つるしがき。嬬子「大きな胡瓜の種さうり、しぼれば、水出るザンブコンブトコヤッサイ〳〵。

○めでた〳〵の若松さまよ、枝も榮ゆる葉もしげる嬬子「船には櫓かい船頭かい、己らかゝ疥癬でうちまたかい〳〵トコヤッサイ〳〵。

○名ぶり船越し(地名)岸あさけれど、なぜに女は色ぶかい。……。

●盆踊唄(仙臺市)

○盆がやァ來たのに、踊浴衣を持たないとやァ、阿父樣やァ買て呉れろや、紺の浴衣に駒下駄。

○盆がやァ盆が來たゞて茄子の皮の雜炊だや、阿母樣やァ、なんぼつんまらないて、茄子の皮の雜炊だや。

●手鞠唄(同上)

○お染久松、出世やし、鮓屋の姉さん鮓呉ないん、鮓が旨いとて負けて遣れ、可嫌かいな、かいな〳〵、かりおそおいね(刈干す稻)を盗まれて、爺と婆が喰ひけんべ、蜜柑こ、蜜柑なるもの青いもの、あを〳〵、あを〳〵、朽葉色々々々、ひイといしよ、ひろい山から、うち見れば、あの鳥見なさんせ、うちばどり、うち

はどり。

二ッとせ、ふたい祭りはよい祭、三がい祭りは下り松、下り松。

三ッとせ、見度く無いのは、あの野郎こ、南瓜に目鼻をつけたよだ、つけたよだ

四ッとせ、よーびきなをるは、いつきッさん、明日の晩からやめさんせ、やめさんせ。

五ッとせ、いつはえんねん卷莨、ほそよにのませてはらまいた、はらまいた。

六ッとせ、六色七色、染めたれば、雨風當れば色さめる、色さめる。

七ッとせ、何程云つても聞かせても、ほそよの心持梅の花、櫻花、櫻花。

八ッとせ、やはらかおいしよ(柔かお衣裳)きれられて、お里歸りはどでがんす、どでがんす。

九ッとせ、此處で逢はぬか何處で逢ふ、こゝらのふちようの眞中で、眞中で。

十ヲオとせ、とく〳〵じん(爺)さん、しやり轉んだ、紫すゞこ、ちよいと出した。

一ットヤ人も通らぬ細横丁おそよと市吉通る横丁〳〵。

二ットヤ二股櫻の其下でおそよと市吉情死した〳〵。

三ットヤ見ても能いよナ櫛笄買つて呉なんせ市吉さん〳〵。

四ットヤ夜歩きなさるな市吉さんあすの晩から止さんせ〳〵。

五ットヤイッ、因縁卷煙草おそよに喫せて口口た〳〵。

六ットヤ六色に染めたる口口を買つて呉なんせ市吉さん〳〵。

七ットヤなんぼ言つても聞かせてもおそよの心持梅の花櫻花。

八ットヤ山で啼くのは鶯が法華經を啼たら出てお呉れ〳〵。

九ツトヤこゝで逢はぬで何處で逢ふ極樂淨土の眞中で〜。
十トヤとん〜叩くは誰さんぢやお前さんの事なら開てやる〜。
十一トセ十一日日は能い日々お倉を開いて祝ひましよ〜。
十二トセ十二のお手筥開けて見ろ開けて見れば文ばかり〜。
十三トセ十三樣へ願かけて子供の一人も持つやうに〜。
十四トセ十四のお女郎を口て見ろ口て見たれば□□□□〜。
十五トヤ十五夜お月樣松の影おそよと市吉小家の蔭〜。
十六トヤ十六双六振つて見ろ振て見たれば一六だ三六だ。
十七トヤ七福神さま宿をとるおそよと市吉□□を取る〜。

十八トヤ八百餘人の供つれて四方八方賑ぢや〜。
十九トヤ十九に成ても機織れぬあす〜婿とる恥かしや〜。
二十トヤ暇くなんせ旦那さまおそよの暇を最う二年〜。

●手鞠唄（同上）

○手毬は〜、なじよに（何故と）はじむ（彈づむ）と音聞けば〜、くゝり樣から手ではじむ〜。
○仙臺で〜、大町ころの中頃で、鼠一疋捕らまへて、月代剃つて髮結つて、牡丹餅賣に出したれば、隣の唐猫ちよと出來て、牡丹餅がらみに占め込んだ〜。

●子守唄（同上）

○寢ろ〜ねんねろ、寢たらば鼠に引かれべい、起きたらお鷹に攫はれべ。

●同（志津川町）

○ねんねこ子守は何處さ往く、あの森越えて里越えて、里の土産に何貰ろた、でんく太鼓に笙の笛。

●雜謠（名取郡岩沼町）

○惚れてち（つ）まら東京のすと（人）に、しゑ（末）は、からしの（鴉）泣き別れ。

○思ふお方はまだ親がゝり、別るゝわたす（私）は、すゝん（主人）もつ（持ち）

○しいた（好い）お方に、さかじき（盃）さゝれ、はいとへんず（返事）も、くつ（口）のうつ（内）。

陸中國

●方言歌（盛岡市）

○おんでアるらンでアると、つー〳〵おンでャない、ジャ〳〵もいないはと、おへれんせ、ちょッこま。

（註）。お出る〳〵とつぴ〳〵お出もなかつた、母も居ませんから烏渡でいゝから御道入りなさい。

●花卷鎗踊唄

○ぢーごーぶの、てべつから、星のおやぢが、つぼぬけて、火事の玉子を、くわぢやり、ふんぐした。

（註）「ぢーごーぶ」は地獄の謂にして山の義、「てべつ」は天逸にて山の頂上、「星の親父」は月の隠語、「つぼ

ねけ」は高く抜けいでたる事「火事の玉子」は提灯の隠語、「くわぢやりふんぐじた」は割然と踏み破りたるを言ふなり、即ち全章の意は、月山上に出るに及び提げ来れる提灯を踏み破れりと云ふに過ぎず。

●金山踊（盛岡）

からめぶし

○からめ〳〵と、おやぢがせめる、なんぼからめても、からめだてアならぬ、ハアからめて〳〵からめて千貫、おやぢの借金ねんぷですませ。

○金のべごこに、錦の手綱、おらも曳きたい、曳かせたい、ハアからめて〳〵しつかりからめて、握つた手綱をうつかり放すな。

○からすア啼く〳〵、とこやの屋根で、お山繁昌と啼く鴉、ハアどつこへ〳〵、どつこへ千両、どつこへ萬両。

○かねがでる〳〵白金黄金、鐵も鉛も、銅も、ハアどつこへ〳〵、どつしり掘り出せ、お國の名物。

○芽出度〳〵の、若松よりも盛かるお山の黄金花、ハアかねつる千年、からめば萬年。

○なをりやでゝくる、世の中はゆたか、どこもかしこも皆繁昌、ハアどつこも繁昌、〳〵。

○なをりやでゝくる、お山は盛かる、かみもこまいも、みなさかる、ハアどうこも繁昌、〳〵。

○田舍なれども、南部の國は、西も東も、かねの山、ハアからめて〳〵、からめた黄金は岩手の花だ、どんどと、ふき出せ。

○花が咲く〳〵、御國の山は、北も南も黄金花、ハアからめて〳〵、からめた、黄金は岩手の花だ、どんどと、ふきだせ。

○からめ〳〵、とお山のうたはお家繁昌と、なりひゞく、ハアからめて〳〵、からめた黄金は、岩手の花だ、どんどと、ふきだせ。

●小坂甚句

○山でシユロイ(白)のは、ヨサギ(兎)にヨキ(雪)よ、シヤト(里)でシユロイ(白)のはショバ(蕎麥)のフアナ(花)

●手鞠唄（盛岡）

○名所〳〵お國は名所、前は海なり後ろはお山、後山から鶉はふけヤる、なんとふけヤるや五ふさ六ふさ、下へさがれば古屋はござる、古屋おいても育てゝおい

て、おうかおうかと七年ばヤし、波坂どつこい、熊のどんさく、肩に掛けたる帷子、かたしんちよの、梅の折枝、中はごぞんのそーりばし、そんそんそり橋、渡らんものを、こきら〳〵小左衛門は、どこでうたれた、鹿島街道の、茶屋の小娘にうたれた、うたれたも面白ないとて、烏やぐらに身を捨てた、一丁〳〵。

○赤河のせ、あかゝのせ、赤河おはつが、お猫子だまして、お茶椀ふかして、つぐもつがれず、買も買はれず、一もんめらーれ、二もんめらーれ、三本柳に雀巣喰て、落ちてお鷹にさあられた、おやな〳〵。

○うけどーたうけどーた、どんなたさまからうけどつた、あれ〳〵向ふの、白壁づくりの、格子づくりの、おたけ暖簾のおちよさんから受取つた、シシーッかりお渡し申します。

○ゑんじょまゑじょまきゑじょさんどん、さいたかどん、しのびはどん、どとゑーぢかみさんまの、こゝは船橋さかりはどん、一ャ二ャ三ャ四、五六に七八は九つ十、一つお前に一丁貸した。

○おん山々々山姥さん、公時さん、中ではたらく奴さん、一二三四五六七八九十てんからおちた、いもやさん、お薯は一升いくらだへ、三十二文でござります、もうちとまけぬか、すからかぼん、お前のことならまけてやろ、笊お出し、桝お出し、とうけよりまなんで橋かけて、頭をきるにはとうがいも、しつぽを切るには八ッ頭、向のおばさんちよいとお出やれ、お薯の煮ころがしで茶あがれ、あとのおばさんごめんだよ、プップ。

○おすゑやおすゑやおすゑどの、そなたのさしたる笄は、貰たか拾たかうつくし

い、貰ふも拾ふもいたしやせん、女房がないとて呑氣する、女房はかねやのお鶴とて、お鶴の針箱あけて見た、開けて見たればおんじょろめんじょろ、しつしつし、ほつほつほ、一丁〳〵。

○向ふ通るはつゝじのおさんかないかいな、紺の股引びろどの脚胖、お前のぼらば私やいまくだる、くだる土産に何々もろた、一分笄二分の櫛で、姉が腰元さ、よたらやとおーけアた（姉御が腰元へよたりと倒れたの意）おけアた柏子に鼻緒がきれた、鼻緒切れたら芳子をたのめ、よしこたのめば錢百いる、錢の百ばりやなはわしやしましよなはわしやしましよ。

●子守唄（盛岡地方）

○ねんねゃ〳〵ねんねして、おいなつたら小豆飯に魚添へて、おかはり〳〵して

あげまする、進げまする、たうどやさん〳〵、あかいぼつぼくんなせい、白いぼつぼくんなせい、まだ米賣るけねい、あさどき〳〵よ。

●同（水澤）

○ねんねろ阿母さん何處へ行た、あちの山に芋掘りに、芋だつほどたり掘つて來た、煮るとも燒とも上げるぞい。

●鬼を定むる歌（九月）

○かくれんなくれん、もづれんものか、その一どにおかれ、まツかいしよ。

○一から三から三から四から、四けらもッけァとんづかない、あざみの、はなッこァさいたか、さきそのばん。

○いちたつ一、のーのやら、ほけァどん、そのやらほけァとん、とんと明けたる

そばやのあかせんこァとん。

○いつこたいつこ、たいの山、おたぬこァとーねこァこしこならやく、こーはこッこのみ、そのまたこーはこッこのみ。

●凧揚の歌（同上）

○風アどーと吹いてこ、豆けるア風アどーと吹いてこ、海の隅から風アどーと吹いてこ。

●雪渡りの歌（同上）

○堅雪かんこ、しみ雪しんこ、しもどのこ嫁アほしい〳〵。

●早ことば（同上）

○かんべな生れた太郎アこめイかみない、米かみたから、田さはいれ、田さはい

れば泥アつく、泥アつーたら、川さはいれ、川さはいれば流れる、流れたら、よしさとッつけ。

○よしさと、つけば手ア切れたら、麥の粉をつけろ、麥の粉をつければ、蠅がつく、蠅やつーたら、扇もてほーい〳〵。

●サノサ節（小坂鑛山）「三十五年頃流行」

○白雪の中に咲いたる梅の花、人知れないにおの色香アラ私が見付けたネ上からは仇な嵐に散らしやせぬ。

○聞かしやんせ隣座敷の爪彈きを、確に文句は明烏アラ果敢ない契ネ世の習ひ、吾々二人じやないそふな。

○心得て居ながら辷る雪の道、戀の淵瀬にはまり込むアラ求めましたよネ一苦勞

〳〵。

○とぎ立ての米じやなけれどしかけたからにや、まゝになる迄きを燃すアラ眞がある樣でネ水臭いホンニ貴方は罪な人。

○勇ましや吹雪卷き來る田茂木野原で青森兵士の五聯隊アラ二百餘名のネ大丈夫が雪は消えても名は殘る。

○見渡せば四方雪なる、田茂木野原で、第八師團の五聯隊アラ二百餘名のネ故參兵、聞くも哀れな凍え死。

○見渡せば四本柱に土俵の上は、東陸常山で西は梅ケ谷中を取持つヨイショ〳〵〳〵中を取持つ木村庄之助。

○暫くは文もよこすな便りもするな、私が勉强の邪魔となるアラ今に學校もネ卒

業すりや天下晴れての妻にする。

○淋しさに窓の戸明けて眺むれば、山邊に掛りし殘月に、沼を尋ねる行雁の、聲聞きや戀路が尙優る。

○一人寢のこゝろ淋しき柴の戸を、叩く水鷄にだまされて、もしや來たかと出て見れば、月に恥し我姿。

○素見客は雨の降るのに格子の外で、蛇の目の傘一寸横にさし小野の東風じやあるまいに、かわずに見とれて居わいな。

○大阪を立出で神戸に兵庫の港、須磨や明石を横に見て、岡山德山下の關、門司や博多に程なく長崎へついた〳〵。

○何となく切れて呉れいと物柔かに、眞綿で首の强意見、八千八聲の杜鵑、血を

吐くよりも尙つらい。

○一すじに思ひこんだる貴方故、そんなに私がおいやなら、痛くない樣に殺さんせ、怖くない樣に化けて來る。

○悲しゆなる若しや貴方と切れたなら、生きて此世に望みなし、身は墨染の墨衣心操に立て通す。

○聞かしやんせ眞實貴方が添ふ氣なら、私も苦勞をした甲斐が、アラ若や當座の花ならば元の他人にして返せ。

○私等に惚れ人があるなら炙豆が生へる、燒いた肴が泳ぎ出す繪に書いた達摩さんが下駄はいてのこ〳〵さい〳〵歩き出す。

○馬鹿ぬかせ藝者風情に誰が惚れる者か、惚れりや私の恥となる、と云ふて諦め

られもせぬホンニお前は罪な奴。

○氣が揉る隣座敷のランプの火が消える、ソロ〳〵初まる紙を揉む、□□□□□

□□□□□でキユー〳〵と拭き取るホヤ掃除。

○思やすむ思はすみます思やすむ、人の花だと思やすむ、逢はむ昔と思やすむ、死んだお方と思やすむ。

○あの花は意氣な花だよアリヤ何處の花あの花自由になるならば一枝折りて床に挿しあの花散る迄眺めたい。

○寒風に雪はチラ〳〵向ふ嵐、表の格子戸をトン〳〵と、慈悲じや情じや爰明けて、今宵逢はねば焦れ死。

○一じやなし二じやなし三じやなし四五じやなし、六でないお山にのろけこみ七

八置ての苦勞して出て來るお客は餘程十の島。

○花盡し山茶花櫻花水仙花寒に咲くのが梅の花、牡丹芍藥ネ百合の花萬年草ならば南天菊の花。

○一つ夜着二つ枕で背中と背中、今にも鳥が鳴いたならアラ互に別れるネ身じやないじやないか、きげん直して此方向いて寢やしやんせ。

○月落ち烏啼いて霜降る夜に只一人、裏の切戸を少うし明けて、お出ないかと出て見れば、月に恥し我姿。

○弘前のステーションから營所が見える、「右へ向け右」中にや左向くネ者もあるホンに見にくい新兵さん。

○行かしやんせ御國の爲めなら是非がない、私や止めはせぬ泣きはせぬ、アレ見

やしやんせネぼんでさへ軍歌唄ふて進み行く。

○北京攻撃に名譽の戰死と聞くからは、今更何の未練に嘆くべきわしや武士の妻

されど此子が、朝晩に父は歸らぬかと待つぞいじらしき。

○逢ひたさに用もない街道を三度四度五度六度、通るばつてん出で來なさらぬは

何ふした譯じやろか、しよかに出て來られんなら出て來られんて、云ふて置きな

され、今度此町は通りやせんとばい、さりてるけしよばい。

○主さんに先月別れて便りない、電報、開いて見れば明日歸る二上り新内「幽に聞

ゆる汽車の笛」停車場迄もお出向ひに行かなきや私の操が立ちませぬ。

○橋の上からフト取り落し、詩「文は流るゝ戀路は沈む取るに取られず棹さしや屆

かず」情ない事ネしてくれた、主と二人の名を流す。

○自愛せよ短褐弊衣の青年書生、詩「衣は肝に至り袖腕に至る腰間の秋水鐵斷つべ

し」第二維新のネ大業は、期して掛れり諸氏の肩。

○堅い石山ネ忍び忍んで瀬田迄來たに、なぜゞに逢はない、粟津に歸れば堅田の

便り、アラ比良の暮雪とネ云はしやせぬぞへ怨みは三井寺、唐崎涙の夜の雨。

○軍人は戰の首途に妻引きよせて、私が出た跡此子大切に、若しも彼の地でネ討

死をしたとの便りが來たならば「泣くな」なんで泣くものか、私も貴方の妻じやも

の、國の爲めなら屑よく討死するのがネ、後の世に殘りし此子の名の譽。

○悲しうなる汽車の別れに兩手を揚げて、お變りない樣と目に涙、濕んで送るネ

硝子窓、一聲鳴いたか杜鵑。

○小夜更けて遊廓戻りの千鳥足、やがて我家の門に立ち「爰明けてんかドン〳〵

明けなきや車でネ猫戻り〜〜。

○櫻井に袂別ちし正成が、愛兒に殘せし言の葉を、芳名千古に傳へなん〜〜。

○□□よ昨夜の處へ行からじやないか、行くのは私は厭はねど、中へ這入れるネ身ではなし、裏門叩いて待つつらさ。

○□けれど皆さんおすきな□の下、三寸下れば我故郷、のぞいて見たかネ□さん

□い涙で泣き別れ。

陸奥國

●方言歌（津輕）

○とだは（ドウシタンダラフ）えこのてでわ（分家ノ爺ハ）雨降る中に、笠もかぶらなへで、けらこも（簑も）きなへで、とゝこ（蟹）はてこな（蝶）になるがいた（毛蟲）はだふり（蜻蛉）になる、道理とめらし（新造）はあッぽ（母）となる。

●イブリ（八月）

○ヤイ〜〜此處の旦那樣の苗はよい苗だ〜〜嬰子「取りませう〜〜、苗を取りませう、ポコ〜〜タン〜〜（水音）キリット（束ぬ）遣つて置てやれ、「一つ三つ九つ三百五百、オホ取た〜〜千三十八取つた、其方何程取たケア、吾ア三千十百サ。

●竈祭唄（同上）

○さアかーるー、さアかる、長者の山、今夜ばーかりー。

●田植唄（津輕郡）

○歩べでア此馬こア、苗代路攬くに、行けば柳の若芽食はせる。

●稻刈唄（青森市）

○ホヤ〜〜、ばゞあが腰は曲つた、ホヤ〜〜曲らねへや、屈んだあヤ〜〜。

●草刈唄（津輕郡）

○今朝の朝草何處で刈たやアい、新法師（地名）流の泡で刈たやアい。

●盆踊唄（青森市）

○今夜の踊子さ啞蟬くちだ、餘計もくちがないぢや、二三疋くちだ。

○あまり聲美しや吾ね半分讓れ、汝に讓るだけ聲でもあ（有）しな。

○どだ（何如）ばいつこらでゝ雨降る中に、笠も被らないで、簑も着ないで、イッペダセ〜〜。

●同（津輕郡）

○今夜のお月樣、出てさよ〜〜と、雲も懸らねでコリヤ晴々と。

○姐ご、そろ〜〜空の星見なか、空に星ないば雨降る定だ。

○如何ば、えこ（えこは分家といふこと）の親父山降りせねやいな、十日や二十日で山降りなるべやな。

●同（弘前）

○ンガ（手前と云ふこと）と連てから、一升の米ア足れねエー。

○どだばエコの（分家のこと）どゝ（父）ア、三子だせ〜〜と。
○三子だせねば、地藏石たてるエー（地藏石立てるとはイタツラするといふこと）
○妾しや主ある、かこひの花よ、一枝なりとも、ヤレア折せない。
○たとひ主ある、花なれアとても、一枝ぐらゐは、ヤレア世のならひ。
○盆の十二日、暗夜で呉ぬか、嫁と小姑とコレ出て踊る。
○盆の十三日十四日の晩に小豆、強飯、もやし（豆萌のこと）

●盆火（同上）

○十三日迎火「瓜の馬コと茄子のべゴコ（牛のこと）で、この火の明で來い〜〜。
○二十日送日「瓜の馬コと茄子のべゴコで、この火の明りで行けー行け。

●ねぶた（同上）

○ねぶたア流れる、まめのはア止まれ。

●お客上がれば（津軽）

○おきやくあがればー、ようこそおいでゞごいしたね、さかなこ、こぢやらこさ
とつてけぢや、サッサ。

「お客上がれば能くこそお出でになり升た、肴を小皿に取て下さい。

●火鉢引寄せ（同上）

○ふばち、ふきよーせ、ふざたてなほーすさ、ふつーこ、ふッばるなーちやコラ
サノサ、ふつとみーてる、サッサ。

「火鉢引寄せ膝立直す、肘を引張りてはいけない、人が見て居る。

●阿母こ餅こ呉へ

○おかこ、もーつこ、けーへー、じやつきと、きらんて、ごいへなねー、なけりや、よごいす、コラサノサ、いまづにけーせ、サツサ。

「阿母さん餅を下さい、すつかり切らして、ございません、なければ、よございます後程下ださい。

●大津繪節（津輕辯盡し）

○あだねす、こだねーす、どせばよごいすばー、おらやばちーくーてーじやッきとこまりさーねーてことなーにちやッぺに、べこ、だんぶりこー、そしーて、やくどーに、ゆかないし、さんぶりーに、ひやめしめらーし、おまいでーば、てこのべて、もちよくちよ、ごいす、わいは、どつてんふぢまけた、ふざかぶ、あくとに、よろた、いなみ、わらはーど、あだこにをッちこッちに、はいごきげんよー

●阿母こ呉へ（青森市）

○阿母こ呉へ、じやきと賣切て御座へなね、そだばよごいす、いまづに、來すぢや、サツサ。

●津輕名所

○名所々々津輕は名所、前は海なり後ろはお山、お山陰から鶉はふけて、何とふけると立寄て聞けば、今年豐年世の中よからう。

●嘉瀨と金木

○嘉瀨と金木の間の川こ、石は流れて木葉は沈む。

●手鞠唄（青森市）

○正月は門に門松、内には蓬萊、にらかにらの實か穂俵、二月は天に紙鳶揚げて空見れば、春の景色も面白や、三月はお雛飾に胡葱膾、内裡樣にも差し上げて

四月は四月八日はお釋迦の誕生、お釋迦參に孫連れて、五月は五月節句は幟を樹て、菖蒲蓬で屋根を葺く、六月は女浴衣を洗ひ初め、七月は子供遊わらひぐさ、八月は栗が桃かぢんばい桃（ちんばい桃とは椿桃也）か、せうごんはい、九月は稲の刈初刈納め十月は雪を握つてお玉と名付けて、抱いて寢たどが皆溶けた、溶けた水には島流し、島の女郎衆の化粧の水。

○あの若衆、この若衆、今朝のしばれ（しばれとは寒空といふこと）に何所行きやる、おまんだゑしの帶買ひに、帶買はゞ地よく幅よく丈長く、結ぶ所さ鶴と龜、下がり〳〵さ藤の花。

○ほさりこのお婆さま何所でうたれた、濱の街道の茶屋の娘子に打たれた、うたれながらも蜂に螫されて、ほぺ（頰）ぶんと腫れた〳〵。

北陸道

若狹國

●盆踊唄

○走る船をも招けば磯へ、寄るは心の信より。

○昔竹馬老いては末の、杖となりたる爺樣。

○餘所に思ひし昨日の菖蒲、今日は我家の妻となる。

●手毬唄（小濱町）

○家の隣のおたやん娘、眉毛ふくしま目は鈍栗目で、鼻は獅子鼻、口は鰐口、齒

は碁石で、耳は木耳、手は胡維、背中は俎板、腹は太鼓で、臍は饅頭で、足は小篠で、歩く姿は蟹の横這ひ、シユツチヨシチヨンバツチヨンチヨン百銜いた。

●同（三國町）

○一や二やお駒さん、まだ繰り返してお爺さん、大事で御駕籠に一服一さかどんさいさかどんは清水かどん、東京で流行るおではつさん百銜いた、

越前國

●左義長（勝山）

○猫が嫁入すりや鼬がなアこど、はつか鼠が二升樽さアげて、おイと飛んだら鼻柱、チヨーイ〳〵、はやせ〳〵早夜が明けるぞ、チヨイ〳〵。

○下女と旦那と喧嘩イすウれば、旦那やさしや下女に呑まれて、口い涙をほろほろと、チヨイ〳〵、赤ひべゝがッつりかけ、かッつりかいたらおけや、おけやおけや、早夜が明けるぞ、チヨイ〳〵。

○浮いた〳〵どんぶりこッこ、梅干やすい〳〵。

○はアやせ〳〵、來年もござれ再來年もござれ、甲町や（自分の町名を云ふ）豊年

だ、乙町(他町の名)やげばいた、チヨイ〳〵。

●盆踊唄（坂井郡）

○盆の十六日や闇なら可かろ、お手を引きよて豆畑。

●福井の船歌

○ちよきや〳〵〳〵付ちよきやちよきやちり〳〵やちり〳〵〳〵ともほざさに友よぶ、はンまちん〳〵千鳥がな、よせくるくるらん〳〵〳〵小波にゆられてもまれたんとろとんとろとゝろもんちにはねられた、ほゝほたんたうつるやうョノ「ゑたんたん〳〵たゝーがの、きゝよこんこゝ此しんきゝも付ハリヤたちひんひんイテ「ああへいよへゑひ付コノゑびさら〳〵〳〵のちやゑたのほんホ、〳〵なむゝホ、ンホ、ソリヤホ、ホンホ、ホイヨエイコノ〳〵此千鳥へ。

○扨も名譽な角力じや日の下開山角力の大よせ、取たる其手はぬき身にひきよせとりぞりじや、かけぞりじやイカくる〳〵くるの車ぞり、かゝかんふけなげ追かけ「じきの羽がへし〳〵のんきゝよこんこゝ此かもソリヤなるホ、ンホンホノヲ「さわゑいイよゑいコノゑいさら〳〵いれくびのホンホ、ンホ、ホみつホ、ンホ、ソリヤホ、ンホ、ホイヨユイコノ此々鼠負に。

○やらやめでたやめでたい天下泰平國土安穩、をさまる御代は天長地久「千歳樂に萬歳樂民も豐に住吉樣の〳〵さま〳〵のかゝしゝや社の末社の「四社の末社の御前のゝんきゝよらんコ、コノ橋ソリヤ橋ひゝんひんひを「さわゑいイヨエイコノエイさら〳〵かけつる中この〳〵そりえへ。

○よかれ〳〵やよかれよ行儀よかれや若衆は皮膚よくつやよく色白くお顔のゑく

ぼに戀のたね、目もとにしほがいやれはらほろ〳〵とこぼれかゝらばなほもよゞ
ざんしよ、さらりとしよていになほもこゝろころ〳〵心ねも「姿なりふりよけれ
はのんきゝよらんこコ、ノこゑソリャこゑへゝんへんもコ「さわゑいいよゑひコ
ノエイさら〳〵〳〵言葉もしなエイコノ〳〵よけれへ。

○かくじや〳〵よはしらじや、しのぶ小部屋のつまどのかけがねちやんとかけた
るはしらは「からころじや〳〵イヤ四ケ角じやからころ〳〵ころ〳〵じやかゝま
んカン角のんきゝ「槍はかしきらふしやよのんき、よらんこコノ角ドソリヤ角ホ
ンホン、ノさわゑひいよゑひこのゑさら〳〵〳〵なひこそ添ひゑひこの〳〵よ
けれへ。

○秋のねざめに〳〵しづがふせやの八聲の鷄に目をおどろかす砧の音はしてゝん

てんから〳〵ほろりかゝはんはらほろ〳〵うちては音もせでのんきゝよらんこゝ
此夢ソリヤ夢へんへゝに「さわゑひいよへさんエイさら〳〵〳〵仇名はよもたゝ
じへ。

●羽子突唄（大飯郡）

○一イヤ二ウヤお駒さん、烟草の烟は長八さん。

●手鞠唄（福井）

○蟬丸や〳〵（千松やといふものもあり）丈がこびくて（低きこと）はりこんで（はりこんでとは幅廣きこと）長刀を差したがる、長い刀が差したくば、向ふのお山の朴の木を、板もおろいて（おろいてとは斬拂ふこと）葉ゐもいで、木挽大工に造らして、漆三合で塗込んで、油三合で光らして、其れを差いては何處へ行きやる、櫻のお馬場（藝福井藩士の馬場なり）へ馬堰きに、馬の

堰きよも、よう御座る、手綱の取りよもよう御座る、低い所が七ところ、高い所が七ところ、低み高みに落されて、腰の大小で胸突いて、竹の尖で足衝て、此所邊に御醫者は御座らぬか、胸の突いたもようならず、是が定斯で死んだなら、私が屋敷へ墓建て、墓の周圍へ松植ゑて、松の周圍に繩張て、繩に數多の鈴下て、鈴やがらがら〳〵面白ヤ〳〵。

●同（武生町）

○鶯や、こなたのお背戸のちしやの木に、鶯雄鳥が二羽止り、一羽の鶯ばあと立ち、一羽の鶯口説には、天窓へてんとうの日を點し、肩には綸子の袈裟を懸け手には水晶の珠數をかけ、足には黃金の沓を穿き、親の爲でも子の爲でもござらん、子の爲でも親の爲でも御座らん、私の〳〵若い時、おつまに離れて、大切の

〳〵お手毬さんを、蝶や花やとお育て申せば、四邊近隣は白壁造で赤壁造で、墨も要らん硯も要らん、猿やポン〳〵手鞠やポン〳〵、桔梗刈萱あしたはなす〳〵

●同（大野郡大野町）

○キヨン〳〵京橋々詰の、紅屋のお方の染もんは、あまり見事の染もんで、ねずみにこま〳〵こま頭、蟷蛉に水引御所車、藪に唐馬、寒椿〳〵、殿樣へ〳〵、お れのおひまを呉れんか、子を連て〳〵、此處はなんちうとこやいの、此處はおば の法蓮寺、梅と櫻と咲たげな、梅はすい〳〵、櫻はおまいと、ほめられた〳〵、ちよど一貫つ ひてもしらず、こんの姉さんなんにもくはず、腹に子がある七月八月、もしもこの子が男の子なら、寺へあげましよ、ものかき寺へ、寺の二階からつきおとされて、たれがおとしたと、和尙さんにとうたら、下町上町の太郎兵衛

がおとした、太郎兵衛惜くいやつ、下の川へ流そか、上の川へながそか、下の川にはどんどがござる、上の川には水晶が御座る、水晶引上げて、だんぶりこ〜ちよど一貫ついてもしらず、こちの姉さん三人御座る、一人姉さん藤屋へ嫁入り、藤にまかれてねてばかり御座る、一人姉さん蜂屋へ嫁入り、蜂にさゝれて寝てばかり御座る、一人姉さん絲屋へ嫁入り、絲で一番伊達衆できしよで、きしよで三番吉野で四番、吉野四番の姉さん達が、五兩で帶買うて三兩でくけて、くけた花べん口べんさいて、あまり暑さに涼みにでたら、家中の若衆におひこめられて、若衆放なしやれ、帶切りやしやんせ、帶の切れたの手つぎになるね、緣の切れたの結ばれぬ、しよんがいな〜、しよんがい屋のばあざん、しよがくたばちに、尻にねぶこ(腐物の)が百七ッ、しよんがいな〜。

○お前と私と駈うちしよ、どこから何所まで駈うちしよ、吉原田圃の眞中で、小間物店を出しましようか、一イ二ウ三イ四ヲ五イ六ウ七ア八ア九コの、十ヲとうから降つたお芋屋さん、お芋一升いくらだよ、三十二文だよ、もちとまからかちやからいぼん、お前の事ならまけておこ、庖丁俎板出しかけて、頭を切られる八ッ頭、しりつぱを切られるとうの芋、向ひの姉さん一寸おいで、芋の煮つくりばしお茶召れ、あとのおならは御免だよ、ぼう〜〜〜。

○一イ二ウ三ヤの山から、わらびふるのは、わたしのあねぢか、わたしの妹か、うらい廻つて、お月さん〜〜、今年のおべゝは何々出きた、あかべゝきしよか、花べゝきしよか、あかべゝいやゝ、花べゝいやゝ、おてまるさまゝで、受取ッた〜。

○おれの大事のお手毬様を、よむぎのおくさん、おつゝりまわいて、あかりとぼいて、おんやかたん〳〵、サ、くれからおわたしまをすが、合點か〳〵、合點ぢや〳〵、隣近所の何々さんから（少女の名を呼ぶ）受取つた〳〵。

●同（勝山）

○乙女の朔日、小判の吸物、蒔繪の御膳で、蒔繪の御椀で、最一杯御代り吸ましよ

○向ひ三軒茣屋で御座る、大弟子小弟子が四五人ござる、中でよいのはお玉でござる、お玉御縁に嫁入させて、綺麗な長持長崎かもじ、入れて結はせて立たせて見れば、立てば芍藥、坐れば牡丹、歩み姿は百合の花〳〵〳〵。

○向こい通るはお熊野同士、肩に掛けたる帷子、かた裾は梅の折枝、中には五條の反り橋、其橋を渡るものかや、渡らぬものかや、こつきりこつきり、小女房ど

こで賣られた、吾妻街道の御茶屋の前で、賣られた、茶屋の娘は、にほんてつくりかいて氣をこえた、一つでは乳も呑初め、二つで乳首はないた、三つではものもよう書く、四つで御手本あげそめた、五つでは何もようする、六つで繰り機織り初め、七つでは何もようする、八つで金襴緞子の織り初、九つで御歯を黑めて十で殿御に逢初た、お十一で玉のやうなる男の子を生んで、明日は春日へ參らせた。

○カンチラさん〳〵、今年はじめて京參り、京の御門に腰かけて、あちら向いてもホーとなき、こちら向いてもホーとなき、人にや子もある嫁もある、わたしや子もない嫁もない、もちと待たしやれ八月に、鯛やお米が取れてから、鯛の吸物二の膳で取つて上げます花嫁を〳〵。

○梅干や〳〵、赤い顔して何ぢやいや、年もよらぬに皺よせて〳〵。

○こんのお輪の寢處見れば、へびが七筋、じやが三筋、麥い蠣蜣が二十五筋、三十五筋に責められて、親の罰かと思ても見たり、子の罰かと思ても見たり、死んだ吉藏さんの罰ぢやそな〳〵。

○こんの姉さん何にも食はぬ、癪かつかへか夏病するか、腹に子がある七月八月八月生れの男の子なら、寺へ上げましよ、新家の寺へ、寺の二階から突落されて、誰れが落いたと和尙に問ふたら、しもちよ、かみちよの、お女房が落いた、お女房憎らし、上の川へ流そか、下の川へ流そか、上の川にはドンドがござる、下の川には苧すべがござる、苧すべ手繰つて、苧桶へ入れて、梭にまつけてキケヤ〳〵織つて、あすは殿さんの夏羽織〳〵。

○濱のお輪に水くれと云ふたら、銀の茶椀に黃金の杓で、枳殼ゑようづ(池)の眞中を〳〵。

○こんのお背戸の朴の木は、枝を卸いて皮むいて、木挽大工に作らして、櫻の馬場へ馬責を、馬のせめよも宜ござるか、手綱の取りよも宜ござるか、高い處で咽を突き、低い處で足を突き、此處らにお醫者がござらぬか、此處らのお醫者は藪お醫者、これが定期で死んだなら、親の屋敷へ墓立てゝ、墓のぐるりへ砂まいて砂のぐるりへ松植ゑて、松のぐるりへ繩張つて、繩のぐるりへ鈴さげて、鈴やガラ〳〵面白や〳〵。

○おくすくい〳〵、娘おくもじ(お茶濱)上げてくれ、隣の婆さん呼んで來い、お茶が沸いたと云て呼ばれ〳〵。

○こんの後の青竹二本、折つてくづいてお駕籠に編んで、前のお駕籠にお富さんを乗せて、後のお駕籠にお輪さんを乗せて、お輪さん袂にチンカラ、カンカラ、金が一歩か、茶碗の缺片か、小供だましの紅猪口ぢや〳〵。

○こんの隣の其の隣、めつちや婆さんの鼻つまり、燒餅やくとて手を燒いて、其手でお釋迦の顔撫でゝ、お釋迦臭いとて鼻つまんだ〳〵。

●子守唄

○寢んねーなされ、おやとこなされ、寢たら子も樂親も樂、こんな泣く子の守せうよりも、去んで阿母さん小遣ひを。

○内の此子は今眠る境、誰も八釜しいふて呉れな、誰もやかましいひはせんけれど、守がやかましいふて起す。

○内の此子の誕生日にならば、小豆三合に米五合炊いて、赤い飯にとゝ添へて、赤い着物着て宮しやんへ參りて、一生此子の健全なよに。

●霰の降る時唄ふ

○雨もざんざ、霰もざんざ、お寺の栃の木チョイ〳〵と上れ。

●遊戯唄

○いつてでつぽだるまたし、いのこにわまざけとつてんぽーのけ。（福井）

○一箱ねぶろ、二箱ねぶろ　重箱ねぶろ。（上同）

○一艘かづいて舟に乘ろ、二艘かづいて舟に乘ろ　…九艘かづいて舟に乘ろ。（上同）

○うんだ〳〵けうんだ、さアさべらで目突いた、「ドッコイ關所は通されぬ。（山勝）

○子買ふ、子買ふ、子買てなぎしよ、赤い茶碗に魚添へて遣る、どの子が欲しな、

どの子なとちやと來い、誰さんが欲しな、それ家の大事の子、それでも鐵砲かたねて走つて來い「女なれば三味線といふ」（敦賀）

○おんべろん〳〵、何そろ、こそろ、子一人頼も、どの子が欲しんぢや、中で選つて〳〵□□さんが欲しんぢや、何さいて置きやる、魚さいて飯ぢや、骨が立つて食はれん、かんで〳〵食はしよ、唾くそて食はれん、流いて食はれん、流いて食はしよ、水くそて食はれん、殿様のお膳にかまぼこ三切。

○かくれん坊に、変ろと言ふて、変らんものは、おもちや、かもちや、かくれの花が、咲いたか、つむんだか、わりや、そつちやい、の、きやれ。

○いつちく、たつちく、のにく、いらくゐんぢゆ、たけのふし、ころふし、池のはたへ茶碗置いて、あぶないものだよ。

○おぢよろき、ぢよばんに、はな紙つけて、草鞋のぎ〳〵、いばはくしや、ふんとこせ。

○おぢよろき、ぢよろき玉、おたねはたくらたくら、おーよに、こーよに、なつの花ちんちくり、おくせめの來年は、わりやそつちやい、のきやれ。

○梅干や〳〵、赤い顔して何ぢアいな、年もいかんに皺寄せて、中の核まで赤成つた〳〵。

●動物唄

○しりの雁々、さきなり竿一本とらせう。（坂井郡）

○かわらす〳〵、御正月ぼちとらせう〳〵。（同上）

●小石を街路に拾ふ時の唄（同上）

○石々、起きよ、地の下がやけるはよ、……起きよ……。

●無手の時のうた（同上）

○おまいらこんか〳〵、こんか買ひに來んか、こんかないと云ふて云ふてこんかほい……。

●北陸鐵道レールエ節

○名も高き敦賀のカンピヨ誰も好く別嬪澤山金ケ崎レールエ、入舟數千艘貨物積み込む石藏へ、レールエ〳〵。

○樫曲り瀬の河内と思ふ間に、早く桑原の東口レールエ、アレ〳〵笛が鳴る是れが三號の隧道かレールエ〳〵。

○汽車が出る中等の室には二人連れ杉津スカレッ大比田のレールエ、過ぐれば山

中の十二號隧道見ゆるぞへ、レールエ〳〵。

○今迄は種々新道もした故に今庄首尾の時を待ちレールエ、ホントニ喜ばしき近きにや、湯の尾を通りかはすレールエ〳〵。

○下等の室何か鯖江南條郡向ふの大道に二人連れレールエ、アレ〳〵逃ぐる人に見られて脇本へレールエ〳〵。

○思ふ武生文に細々認めて今度汽車便待つわいなレールエ、神掛願升どうぞ麻生津滝からずレールエ〳〵。

○鯖江よりツク〳〵寢顏を打眺めどうせこうなりや歸せやせぬレールエ朝六川に大土呂き飛び出す停車場レールエ〳〵。

○足羽郡七時に福井へ九十九橋、所の名物奉書羽二重レールエ、ヲヤ〳〵始つた

又もお前の九頭龍川レールエ〜。
○森田なら大事なされ其指輪、金津なんぞや買へりやせぬレールエ、マア〜
お喜びお前の新庄が見えた故レールエ〜。
○乗り遅れ主と別れて獨り旅心細呂木松林レールエ、歩みは遅れ隧道越ゆれば中
の谷レールエ〜。
○大聖寺をさした昔とかはらぬは所の名物九谷焼レールエ、土産に買ましよ暫時
山代で湯治するレールエ〜。
○九谷焼元祖は吉田屋傳右衛門、名のある人の故郷へレールエ、思へば慕はしい
互に中よく此土地でレールエ〜。
○動橋動かぬ妾の心をも主は知らへで浮氣するレールエ、ホントに憎しいお前を

小松の一と思案レールエ〜。
○美川出で松任の停車場などゝお前の犀川でレールエ又もやだますか最早其手は
浅の川レールエ〜。
○金澤の公園の三好で支度して、眼元ほんのり櫻色レールエ、似合ます梅鉢御紋
の二人連れレールエ〜。
○名殘りが惜い主は乗替へ七尾線、前夜替した起證文レールエ、ジョンクション
互の心津幡替らぬ此證據レールエ〜。
○倶利加羅の山に假寢のわび住居、一人くよ〜物案じレールエ、雁金歸り行く
情け知るなら其文をレールエ〜。
○德利加羅冷でつぎ込む茶碗酒、意氣地も強き江戸ッ兒の、レールエ、隧道でみ

がき上け、仕事は流々あの工夫レールエ〳〵。
○大切に肌身離さぬ此寫眞石動掛たるはで姿レールエ、眺めも飽かぬほんに思へば癪の種レールエ〳〵。
○今迄はさんざ福岡したけれど、今ぢや小矢部の後を嗣ぎレールエ遊びを止めて二人仲良く新世帶レールエ〳〵。
○人の知る其名も萬高岡字屋で今宵は御愉快明日は又レールエ分れて乘替る中越線路へほんやりとレールエ〳〵。
○大門へ着けば乘り込む下等室庄川上りの京參りレールエ何人も赤毛布達磨姿の田舍者レールエ〳〵。
○終列車吹き込む夜風にショール着て、互に體を小杉つきレールエ、話せます、

痴話や口説のあるたけをレールエ〳〵。
○富山程積る話もあるけれど、逢へば口説で夜を明すレールエ、一番汽車で腹を立、山泣き分かれレールエ〳〵。
○長の旅つけば神通の鮎の鮓、過ぎし名所の物語りレールエ、疲れば通ります藥なんぞはいりませぬレールエ〳〵。

加賀國

●方言唄（金澤）

○金澤名物、にャーにャ、いッていらッせ、いつてこやに、およろしう、そうけ、そうけにございます、あいがとう〜〜、ャーャ、つひでに、おばいに、およろしう。

○うざくらし、雪のみならで、でかいこと、雨もふるがじや、風も吹きみす。

●地萬歳舞踊唄（金澤）

下道中舞うた

こは往時參勤交代として加能越三國の大守たりし前田侯の江戸下向道中の事柄を詠みしものなり

○德若に御まんざい、とや、ありがたかりける君が世に、君が心は色をます、その色をます花のころ、北陸道の繁昌や、六十三次宿々の、その宿々の萬歳の、ことばに祝ひたてまつる、先づ一番のおん泊り、たつて、振り出す御城下の、ャレお通りャ、先きのけと、三本道具の數々は、つきせぬみよの御家中に、君が心は淺野川、すこしなぐれば春日町、むねは大樋と思へども、義理と情は柳橋、今町大田二日市、右にたばたの八幡宮、拜して通る津幡宿、五穀成就、萬民の共におひるは賑しき、しばしねざゝや竹の橋、前橋越えて倶利伽羅の、併に大小不動あり、三里の峠打越えて、はにゆう八幡伏し拜み、今石動や、をやべ川、四里八町の道すがら、遙に見ゆる高岡の、御本陣に着き給ふ、二番の御泊り小杉、下村、打越えて、音に聞ゆる草島の、渡しを越えて、よろこんで、はるか岩瀬の飛だん

ど、心に懸るが娘茶屋、我も人もと入り給ふ、くちとひげとはなめり川、早附川を打越えて、魚津の町に御本陣、三番の御泊り、四十八瀬の川越えて、日數をつもる、三日市、浦山宿と思へども、一夜は二世の相本の、橋を渡りて子寶の、泊りの宿に御本陣、四番御泊り、國の堺も今日限り、市振り宿を打越えて、歌でなびかす駒がへり、我さきに行く、たつ波の、ひくまも待たず親不知、日本に名高き姫川の、どうぞ近江と思へども、とかく浮世は絲魚川、五番の御泊り、のふ權現を伏し拜み、涼しく見ゆる名立山、青木峠に腰をかけ、四海の波も治まりて、のぼりくぐりは有馬川、あまり砂地は長濱の、やつこ六尺よろ〳〵と、ごちの茶屋へと腰を懸け、各休むは中屋敷、猩々で渡る、いづみ橋、高田の宿に御本陣、六番の御泊り、荒井の宿を打越えて、たんとお客を松崎の、其國元の奥方の、氣

は關山や二俣の、しぶれるやうに思へども、大たんぎりや小たんぎり、こゝろ關川御關所の、熊坂越えて野尻をや、まつても行けや柏原、古間で通る小玉坂、あら町の宿に御本陣、七番の御泊り、はいして通る善光寺、川中島の合戰に、そのかみ越後の謙信は、鎧も脱がずにかち渡る、丹波島とは是とかや、心深見の筑摩川、社代の宿はこれとかや、姨捨山を右に見て、げんこ煙草の品々に、恩にきせるや旅の空、坂木の宿に御本陣、八番の御泊り、町端の茶屋に腰をかけ、たんとのみ込む白酒や、上田の宿はこれとかや、運の開くは田中宿、小諸の宿を打越えて、大坂小坂はこれとかや、左に見ゆるは淺間山、峰の煙の絶間なく、追分の宿に御本陣、九番御泊り、駒も勇みし沓掛の、えぼし見ゆるは輕井澤、碓氷峠打越えて、坂本の宿に入り給ふ、右に見ゆるは妙義山、夜に日にかはる風景を、百合

若様が射止めたる、早や〳〵御宿を松井田の、安中宿に御本陣、十番の御泊り、名も高崎の清岸寺、水の落合新町の、本庄かけて敦盛の、熊谷の宿に御本陣、十一番の御泊り、吹上て行く鴻の巣の、桶川越えて大宮の、諸願成就浦和宿、蕨の宿に御本陣、十二番の御泊り、今日は御江戸へつき〳〵の、並木の松を打過ぎて、戸田の渡しも恙なく、ヤレ嬉れしゃと板橋の、伊勢屋〳〵の待ち給ふ、是ぞ大君の下屋敷、見るに思ひをます鏡、白山かけて追分の、御門開くは一ケ國、鶴の羽をのす萬ざいと、祝ひ歌へて舞納む。

●壽萬歳

こは其名の如く壽を祝はゝん主意にてものせるものもれば、あらゆる目出度事を書きつられたり。

先づお正月の壽に、上は殿様下は民、年德祝ふて新玉の、年の初めの若夷子、

先づ御屋敷には恵方棚、燈明あげて神酒供へ、上下諸共着衣初め、差向ひたる鏡餅、餅といふ名の目出度さは、殿様國持城持御子持御知行持、榮え榮ゆる君が代の、殿様若様御姫様、御壽命申さば、鶴は千年龜は萬年、浦島太郎は八千歳、東方朔は九千歳、西王母が園の桃、桃に毛もある種もある、女中の禮日は二日にて奥様若様御姫様、小褄揃ゆる總鹿の子、梅に鶯桐壺の、繻子の打掛しゆつとりと、年玉並ぶ山高き、蓬萊さして喜べば、重ね土器汲み返す、屠蘇の機嫌で初夢を、見るぞ松とて取揃ひ……、君が祝は鶴龜の、竹もちしるの門飾り、しやれば、の川のじよろ〳〵流れ、水の道草こりごりに、汲めば薊のあ痛しく、手を土筆虎枝、杉菜、ちようほう草、花毛氈の蓮華花、それ〳〵そこに、こりや是れ此處に蒲公英〳〵蔬草、花に戯むる蝶々の、飛んづ跳ねづの頑是なく（コ、より采を右

の手に持ち左に扇子を持つ）今若君は八歳にて。一ッ二ッの溫順しさ。さアさこれから馬で行かう、おッと合點と竹馬に、心も勇む春の駒、轡にあらぬ口柏子、エヘン〳〵手綱をかい繰りし、あざみの鞭を發矢と當てゝ、乘り廻はす、ひらひらと飜めく揚羽の蝶々、平家の定紋、平家の奴原、マッ此の如くリユウ〳〵と打拂ひ、追ッ散し、采配おッ取り上げ追へば、數多の軍兵、駈引合點じや、ほゝいや〳〵、ほゝ珍らしい、弓矢神の惠みを受け、運の開くは鎧の內、其方の好きな白の駒、眞紅の八ッ房、白銀の轡を喰んませ、鞍重ね突ッ立つたり、其時軍さの龍頭、兜の星を閃めかし、日の丸書いた陣扇、寄せ來る敵をひらり〳〵招ねき寄せ、丁々發矢丁發矢、オ、勇みよし心地よし、勇み進みし御骨柄、威風供はる天性智性、香ばし眼の中只人ならぬ、扨てこそ源氏再興の、御大將となり給へば、

御たち宜しく公達と、御ん喜びは限りなし。

附句「貢物に取りては、綾の卷物三百反のたどりうすぎが百重ね、河內の國より綿千反、紫檀、黑檀、龍腦檀、丹後但馬の貢物、備前よりも名作名劔、土佐の國より眞黃の駒、阿波讃岐より千石萬石、五穀ぶちうの米俵、其外西は近江東に關東、御寶路をさしさいみつ、千歲の御祝儀萬歲樂。

●婚禮道具づくし

德若に御萬歲とや、有難かりける君が代に、そも陰陽の二つより、ばんもつ生ぜぬためしなし、我が日の本の其昔し、いざなぎいざなみの御神が、初めていんやう和合なり、夫婦の道を敎へ給ふ、今につたへてためしなし、上は一天下はしゞの男しゞの女までも、婚禮祝儀とり結ぶ、其婚禮の道具には、唐も日本も一樣に

祝ひさゞめて樂みを、數へて見よやことぶきの、先づ一番の道具こそ、對の金紋はさみ箱、おひもてりそう猩々緋、酒であたまは土用ぼし、しりはだいなしかんざらし、ふりだすつぎは長刀の、三條小鍛冶宗近が、きたひにきとうわざものも天下治世の御代なれば、鞘におさめてかはかぶり、花むこ樣の御道具は、これは□□□でまち給ふ、□□〳〵ごけいこあるであろ、二ばんの道具こそ、二番はすなはちおのりもの、揃の六尺しと〳〵と、かいぞへ女中がとりまいて、みすの内よりもれ出づる、花の盛の櫻姫、年はいざよう月のかげ、上衣のぬひも鶴龜の、松竹すきなよめごにて、このまつ竹をしんじたら、こよひあふよのうれしさは、開きかゝりし初花の、いろもてりそうべにのくち、緑の髪ややなぎごし、三番の道具には、おいろなほしのこそでびつ、ねやの祝儀のはづかしく、顔はじゆうき

うひぢりめん、わかむらさきのゆかりより、ものも淺黄の心かと、きはもみうらのくろねずみ、かはらけ色の初戀路、なんぼ白地のこゝろでも、いつそおもひをくちなしの、いふてしもふがどふせい茶、どんすしちゆんのにい枕、二つならべし床のうち、そのうつりがを花色に、染てきやせん中納戸、四ばんの道具こそ、手道具いれしくろ棚の、みずしくろだなみだれ箱、かい桶手箱犬張子、思ひの糸をまきこんで、琴三味線の音色より、君がかはひのひと事を、なにゝつゝまんたたう紙、硯の海は淺くとも、思ひは深きかず〳〵を、筆に山〳〵ふみ箱の、書き散したる歌加留多、丹ざく箱のことのはも、君がしきしにするならば、ちつとりん氣がつのだらい、じやうずにするがわたしがね、曇りなき身の正直を鏡にかけて見せやせん、五番のだうぐこそ、部屋の圍の屏風箱、はゝ金屏風銀屏風みす屏

風、并べ立てたるねやのうち、腰元女中は次ぎの間に、そのむつ事を聞くならば裏方よりも□□□□を、てにはせはしきすじめがた、いもせはなれん中なれば、やがてむすばん岩田帶、生みならべたる子寶と、ともに御子孫繁昌と祝ひかぞえて舞ひをさむ。

●獅子舞（河北郡四英村）

○伊勢のたゆさま春出てござれ、春は日も好し日も永い、其の囃し方「伊勢のたゆーさま、ヨーンヨーイ、春出てござれ、ヨーンヨーイ、春は日も好し、ヨーヨーイ、サア日も永いー、サーレバヤットコセーエ、ヨーイヤナー、アリヤリヤン、コレワノセ、ヤーットコセーエ、アリヤヤン、コレハノセ、サーナンデモショー。」

○伊勢は津で持つ津は伊勢で持つ、尾張名古屋は城で持つ。

●天氣天象の唄

明日の天氣を卜する時

○あさあ、てヤき、よーいーか。

雨のポツ〳〵と降來る時には

○雨晴れてくれーなんまいだ、うら〳〵の山に、みのかさおいて來た。

雷鳴の時には

○かんなり山往け、山から里いけ、里にさぎや居る鷺や居る。

紙鳶を揚ぐる時は

○大風いやで、この風はたのむ。

羽子をつく際。

○風の神さん大風いやる小風もいや、、なむいらんなむいらん。

霰の降る際には。

○雪は一升、あられ（霰）はごん合。

初雪の降る時には。

○爺さいの、婆さいの、わたぶし雪が降るわいの、雨戸も小窓もたてさッし。

飛雪紛々たる時には。

○天な灰やたつ、下にや雪や降る。

○雪は降る〳〵一丈も二丈もドン〳〵、津幡（河北郡の地名）街道通り泊らんせヨンヨイ。

月明の夜は。

○お月さんいくつ、お十三七つ、それやまだおわかい、こッちや、ねんね（赤子）生んで子生んで、おんばさ（乳母）に抱かいて、油買ひにやッたれば、油屋の前で、すべッてころんで、油一升かやいた、其油どーした、犬がなめてしもた、其犬どーした、殺いてしもた、其皮どーした、太鼓に張ッてしもた、其太鼓どーしたッてッた。

○天竺天の星さまが、お釜の前で子産んで、其子は幾つ、お十三七つ、ナ、がさ被せて、お馬に乗せて、川原へ出いて、川原のジョ〳〵（餡）と、小川のジョ〳〵と、こーわい（飯赤）蒸せてか、一口呉され、まだ蒸せぬか、兎や稼娶、團吉や媒人チョーンマチョンマ。

●歳時唄

●正月

○正月さん、どこまで、いらした、山のころ〳〵橋の下まで、いらした、御土産はなんやつた、榧や勝栗蜜柑、こじ、たちばな、犬のふんだ年餅、猫のふんだ粥餅、あまの裏の串柿（金澤市）

○正月々々何處までござつた、倶利伽羅（河北郡の地名）の茶屋迄ござつた、土産は何ぢや蜜柑柑子アマの原の串柿や、納戸のさま（隅）の黒豆や。（河北郡西英村）

●初午（河北郡西英村）

○四角四面に倉建列べ、土藏倉七つに金倉七つ、ドーイドイ。

●福俵（同上）

○福俵福右衛門、一ころ轉がせば千俵、二ころ轉がせば二千俵、三ころ四ころは數知らず、福は貴方へどつさあり。

●萬歳（同上）

○アゝ福の神、福の神、福が來たワいの來たワいの來た、大鯛小鯛口がたい、鼻の下の食ふたい。

○ヤットコ來れトコ來れ、旦那樣一文お呉れんか、通れ〳〵と仰れど、通る位な身上なら、丁稚の一人も引連れて、大小袴で引廻す。

○師走狐が跳て來た、コン〳〵〳〵、打つても鳴かず、打ッても鳴かず、一文呉れゝば一年が間コン、二文呉れゝば二年が間コン。（狐の頭の造物に竹を添へたるものを打振りて此の如く歌ひ續け、金錢を

施興すればコン〳〵と連呼しつゝ去る

●盆踊唄（金澤）

○いつは來いでも盆には御座れお墓まゐりにかこつけて。
○盆蘭盆のをどりに踊らぬ者はをんぼ乞食か番太郎か。
○御座れ來いとは言葉の品よ、まこと來いなら呼びに來い。

●同（河北郡西英村）

○いつは來いでも盆にはござれ、死んだ人さへ皆ござる。
○盆になつたら紺屋が燒ける、伊達な浴衣を白で着る。
○一の谷から二の谷までも、蜘蛛が絲張る絡新婦が。
○お月さまさへ桂と二人、私や山路唯一人。

○お月さまさへ夜遊なさる殿の夜遊や無理はない。
○殿と旅しりや月日が忘る黄鸝鳥鳴く春やそな。

●茸狩唄（河北郡西英村）

○松みんー（松耳）〳〵、親に孝行なもんにあたれ。
○松露々々出松露、口口むいて出松露。

●同（同郡七塚村）

○松露々々出さんせ、親も子もとんちん出。

●勞作唄

●臼摺唄（河北郡西英村）

○田の神のお出の時、地も響く、木草も靡く、アノ百姓も喜ぶ。

○白々と笠端がそろた、足引き手を振り上げて、アノハカ（田の此界より彼界迄一行植付くることを一はかといふ畑の耕作などにも云へり）も長ハカヤ。

○朝はかに（朝疾くの意）植ゑたる早稲は何早稲や、葉廣の早稲や倉の下積や。

○朝はかに、牽出す駒は何駒や、葦毛が鹿毛か、アノ隅の黒駒や。

○早稲刈ッて、中稲にかゝるカンジャ（鍛冶屋）殿、鎌を揃へたか、百挺の鎌を揃へたか。

○お十七もろたる其年は、八穂で八合づき、三把の稲で五斗五升。

○お十七が鏡一枚持ちはせぬ、水が鏡か、チャヲケ（手桶）の水が鏡かや。

○烏めが、谷の小ショグ（小さき泉）で影を見る、このよに身が窶れたかや、窶れて色

の黒さかや。

○烏めが、松の小枝に巣を掛いて、鷹に蹴落され、科ない松を恨める。

●手鞠唄（金澤）

○己れの父親は金山へ、金が湧くやら湧かぬやら、一年過ても狀が來ぬ、二年たッても狀が來ぬ、三年三月のお十九日の、朝の六に狀が來て、起て火を焚き燈明を燈し、狀の上書讀で見て、三人子供をどうどした、一人は伯父御に預けましよ一人は叔母御に預ましよ、一人は緣にも付けましよぞ、緣に付けたる裝束は、紅色小袖が七葛籠、白い小袖が七葛籠、帶やたぐりが十二筋、鐵漿お壺が馬に五駄馬に五駄、是れ程仕立てやるほどに、拔かれて御座るなのう姫の、去られて御座るなのう姫の、拔かれて來うとも、去られて歸ろとも、思はねど、男の心と秋の

日は、夜の間に七度、日に三度、替もの替るもの、すつとんと、もひとつ返いてすッとんと。

○今度殿様、お江戸へお出立、御籠廻者は誰々様ぢや、一に内膳二に河内様、三に左京様西尾の隼人、隼人御馬に小姓を乗せて、小姓下るか己れ今上る、玉章を遣らぬか言傳せぬか、玉章を遣にも、言傳しようにも、七里八里の山奥なアれば筆にことぶき硯墨もたず、若しもお茶屋へお泊りなアれば、茶屋の暖簾柏葉の紋で、茶屋の亭主は彌五郎と申す、彌五郎お方(お方とは妻のことはり)がおせんと申す、おせん息災、彌五郎息災、やがて返ると、言ふて賜る、云ふて賜る、すッとんと、も一ッかやいてすッとんと。

○おふぎ町の、こふぎ町の、茶屋の娘は、姉よウりも、妹よウりも、中のごぜん

が、二ほん手きゝで手きゝで、手きゝなりやこそ、五では絲を繰初、六ッでは結機織り初め、お七では、綾を織初め、八ッでは屋敷を擴げたて、お九で嫁入初て十で殿子に遇初て、お十一で、花の様なる御子を設けて、お十二で關東へ參られる、關東參りの、出立姿が、何程優しや、優しや、やさしけりやこそ、下に白無垢、合に紅さし垢鹿子、お裾もをとや、お襟もとーや、はまアばたアたの、お女鶏等も、殿子もどうで殺せん〳〵、女鶏もどふで殺せん〳〵、雨も降らんに、春日山から、水が出て來て、おまん小袖が流れる、とても流さば、水といふ字と、戀と云ふ字と、たつた一筆、書いて流しやれすつとんと、も一つかやいてすッとんと。

○せん〳〵、〳〵どの乙娘、額は白顔眼は水晶、今度嫁入する時は、朝早よ起て

窓開て、窓の明りで髪結ふて、白紛塗つて紅差いて、舅さん姑さんおひんなれ（起きると）お茶が沸たあおひんなれ、とん〳〵叩は誰様ぢや、新町米屋のお爺様ぢや、朝から何しにお出でたぞ、雪駄が替つて換へに來た、お前の鼻緒は何鼻緒、そり〳〵鼻緒のそり鼻緒、有つたら見出して返しましよ、父親は德利、母親は燗鍋、娘茶碗で引掛けた、家の丁稚が雀燒く手々、猫に取られて猫を逐ふて〻、闘に蹟つすつとんと、もひとつかやいてすつとんと。

○新町彦三の相生町の、坂を下るれば肴屋が御座る、いふに言はれん小娘が御座る、隣合にお寺が御座る、寺は眞言魚が御好き、何時の間にやら、寺の坊様とそ〻繰合ふて、木綿三反白絹貫て、なんに染よじやと和尚さんに問へば、和尚の物でなしお主の物ぢや、紋に明入高燈籠點けて、裙にちら〳〵坊様を附て、其所で

坊様お腹を立て〻、袈裟も掛けまい衣も着まい、四十八夜の勤めもせまい、おつちを引連れ、京や大阪、廻り巡りてすつとんをと、もひとつかやいてすつとんと

○己の姉は飛騨屋へ嫁入、飛騨屋一番伊達者で御座る、五両で帶買て三両で絎て絎目〳〵に捻金差いて、立てば芍藥坐れば牡丹、歩行姿が百合草の花、百合のヲ花すつとんと、もひとつかやいてすつとんと。

○たいりのひめ〳〵、ことやこん日、たいじのおてまる、四十四五日おかく申て縁でおといて後もつがずに、草も撚ずに慥に〳〵お渡し申候（と云ふて他人に）慥に〳〵請取申候、たいりのひめ〳〵。

○とん〳〵叩くは誰様ぢや、新町米屋のお爺さん、今時何しにお出た、雪駄が替つて參りました、あなたの雪駄は如何云ふ雪駄、そりそり緒のそり緒の、家の下

僕は雀やくてゝ猫追ふて、敷居につまづいて、スツトントン。

○御家方そでかた、御手に重花、九ちよう十ちようお十月から五百月まで、おうそれ衝上て（是より手の中にて鞠を高く上げ廻はすなり）一よりんぎよ、二よりんぎよ、三よりんぎよ、四よりんぎよ、五よりんぎよ、六よりんぎよ、七よりんぎよ、八よりんぎよ、九よりんぎよ、十よりんぎよ、十から十まで、後方へ戻つて、返せん〳〵、戻らん戻らん、一ちよーりん、二ちよーりん、三ちよーりん、四ちよーりん、五ちよーりん、六ちよーりん、七ちよーりん、八ちよーりん、九ちよーりん、十ちよーりん

おじふに重ねて、牡鶏〳〵、牡鶏一羽は一夕、牡鶏二羽は二夕、牡鶏三羽は三夕牡鶏四羽は四夕、牡鶏五羽は五夕、牡鶏六羽は六夕、牡鶏七羽は七夕、牡鶏八羽は八夕、牡鶏九羽は九夕、牡鶏十羽は十夕、おじふに重ねて、牝鶏〳〵、牝鶏一

羽は一夕、牝鶏二羽は二夕、牝鶏三羽は三夕、牝鶏四羽は四夕、牝鶏五羽は五夕牝鶏六羽は六夕、牝鶏七羽は七夕、牝鶏八羽は八夕、牝鶏九羽は九夕、牝鶏十羽は十夕、おじふに重ねて、後方〳〵は一丁目の後方、一ちよーめ、二ちよーめ、三ちよーめ、四ちよーめ、五ちよーめ、六ちよーめ、七ちよーめ、八ちよーめ、九ちよーめ、十ちよーめ、お十に重ねて、おちん〳〵、一イ二ウ三イ四五六七八九十、井戸の側の丈はな、しよ〳〵なしよ〳〵、出替る、一ーヤ二ーヤ、三ーヤ四ーヤ、五ーヤ六ーヤ、七ーヤ八ーヤ、九ーヤ十ーヤ、十で降て、一十ヤ二十ヤ三十ヤ四十ヤ、五十ヤ六十ヤ、七十ヤ八十ヤ、九十ヤ九かんの、親の目のまへで（此所にて落せば始めに戻るなり）百衝いた二百衝いた、三百衝いた、四百衝いた、五百衝いた、六百衝いた、七百衝いた、八百衝いた、九百衝いた、千衝いた、せんのおろしの、お

さわのさッこの、おさん大事と、前の女郎衆と、御の女郎衆と、御式臺から御臺所まで、御手を引寄せ、御手おはなーもち一葉へ（初に戻るなり）

此外、娘達兩人相對し鞠を衝くわり其歌は（相衝き百ついた相衝き二百ついた）と千まで云ふなり又（松葉で百衝た松葉で二百衝いた）と云ふものあり。

●同（鶴來町）

○おつよ、つよ〳〵、つよの前掛しやんとして、奉公せうにも何しよにも、おれは長者の子やもんの、長者の子やとは知らなんだ、朝の四つに夜が明けて、親の方から狀が來て、狀の上書讀んで見れば、上れと仰やる下れと仰やる、御土產はノーレンビシャクにハナビシャク、やがッてございの（早くお歸りなさい）おつよ樣、やがッて來うやら來まいやら、若も西や東のお浪に打たれて死んだらば、後を賴むぞ叔父

御樣、叔父御樣、叔母御樣、四十五貫の金持が、金がゾク〳〵なみだうつ、浪の打つこたア道理なり、高い豆買て何にしる、高い豆買て船に積む、船は何船關東船、關東土產に何々もろた（貰うた）一に重箱、二に硯箱、三に笹色の帷子、誰に着しよとて貰て來た、叔母に着しよとて貰て來た、叔母は死がれて（死なれて）今日は七日、七日々々と二七日、墓へ參ろと思たらば、墓の周圍に砂撒いて、墓の中には松植ゑて、松のシンボ（棺のこと）にたかとめて、新町タカヤと云ふて下されスットントン。

○さて〳〵ハッツヲの惣兵衛樣、おいでは又樣彌吉樣、彌吉さ今日は奉公に、三さは紺屋へ形つけに、三さ妹は河原町の煙草問屋へ、娶入さるとて、ダンゴすッころがいてスットントン。

●同（河北郡七塚村）

○うちのかいど（我家の門口）に刀豆植ゑて、それはだんのもんぢや（誰の物か）オッチョサ（千代さの訛）のもんぢや、オッチョサそれ〳〵簪落ちる、落ちりや落ちねば何のかもこと、ある、うちのセンドサ（船頭様か）にまた買てもろシートントン。

○うちのニャーニャ（嫁）は伊達こくニャーニャ、縞の前掛に茶のヒボ（紐）つけて、赤い褌をちよつと掛けて、かたいッぽ（手片）に杓持ち、かたいッぽに手桶持ち、村の在所へ水汲んに出たら村の若衆にかけ止められて、小突放され帶切らされて、帶の切れたが、むーしばれぬ（結ばれぬか）シートントン。

○オシがばーばは椽から見れば、菊や牡丹の手鞠の花を、手鞠ようきく上れと仰しやる、オシャの赤子はカイ〳〵ツーブで、ツブてせう〳〵男の子なら、かいで

あげますタケダン様や、竹を伐るなら三本伐ろや、オミヨマ泣かんせなパン買て上げる、パンのめぐらへソラケンまーいて、うちの隣の米屋の娘、米屋娘は佳い子でござる、京で一番大阪で二番、京で三番吉野で四番、江戸で五番の姉様なれど、今年初めに花見に出たら、村の若衆にかけ止められて、小突き放され帶切らされて、帶の切れたが、むーしばれぬシートントン。

○トン〳〵たゝけば、誰さんぢや、新町米屋のお爺様、今から何しに入らはッたセキダ（雪踏）が代りて參りました、あなたのセキダがどいセキダ、私のセキダはこいセキダ、とゝはとツくりこゝはかんなり、うちのデッチコ（男童を朝り云ふて）雀燒くて、猫に捕られて、猫をぼふ（逐）たら、シキにけとまついて（敷居に蹲いて）泣いてばッかりシートントン。

○オダイ初マはだいけの初マ、年もいかずに馴染を持ッて、馴染誰やらと尋ねて見たら、しかし油屋のボーヤサ(男下)でないか、紺のタブ(足袋)穿いてヤッヲのセーキダ、セキダさら〳〵紋羽のターブ、連れていてならアガサキまでも、まだもいならネリヤの高へ、枕並べて寐るばかりシートントン。

○おれが姉様何で髪結はん、櫛がないかね紙捻がないか、櫛も紙捻も買て來てあれど、腹へ子が來て、何がおもッしよて(面白くて)髪結はんのシートントン。

○オッロのマツラのテラ井樣、主人の息子に手を掛けて、大根畑の眞中に、帶して上げると言ふたらば、其間にお腹がでかはつて(腹れて)まり待たんしシートントン。

○向ひの小寺を誰や建てた、八幡長者の弟娘、みめよし嫖致よし姿よし、手には

二本のたまを嵌め、足には黄金の履を嵌め、こんの山路はよいけはよいけ(早く行きなさい)せかさんせーなヤ(急ぎなさるな)御馬に乘りたか乘りたか乘らさんせ、御馬もぜん〳〵御駕籠もぜん〳〵(馬に乘るにも駕籠に乘るにも賃錢を要すとなり)チロレンマロレン

○向ひの山に火が見える、アーレあれ何ぢやあれ何ぢや、あれは今來る嫁來松明や、松明ならばやり上げてとぼせ、差上げてとぼせチロレンコロレン。

●羽子突唄

○(一)人きた、(二)人きた、見(三)んまに(四)人來た、いつ(五)のこつちや、むか(六)かし、な(七)んのこつちや、(八)かまし、こゝ(九)の家、と(十)ひに來た。

●數へ唄

●一皿二皿（金澤）

○一皿、二皿、三皿、四皿、五皿、六皿、七皿、八皿、九皿、十皿、十皿のなかに、眠たい者はねやうぞ、起たい者は起きよぞ。

●ひことりいやま（同上）

○さつせ、ひことりいやまの鶯一羽ね、一で橘、二で杜若、三で下がり藤、四で獅子牡丹、五ッいやまの千本櫻、六ッ紫桔梗に染めて、七ッ南天、八ッ山吹に九ッ小梅を散らしに染めて、十でとよくの松が枝染めて。

●一ッひよどり（同上）

○一ッひよ鳥びッびがたより、二ッふたなた大根がたより、三ッみゝじやこ川の瀬がたより、四ッ夜中に提灯持がたより、五ッ出雲の神さんたより、六ッ婿さん嫁さんたより、七ッ何より寶がたより、八ッ山伏法螺の貝がたより、九ッ紺屋の染物たより、十ヲデ殿さん御馬がたより、十一、十一屋の竹の子たより、十二婆さん杖棒がたより、十三春日の立まつり旗が立つたら見においで。

●いつにお願申せば（同上）

○いつ(一)に、お願申せば、に(二)が〳〵しい、事なれど、さん(三)〳〵の、作りを、いたいて、し(四)樣も、御座らぬ、ご(五)しのう、を、あげた、ろく(六)には、はなれる、質(七)を置けば、はぢ(八)をかく、食(九)やうも、ござちぬ、それで、殿(十)樣へ御願申した。

●子守唄

○たんち（小兒のこと也）のおたから何處いけたア、山々越えて里いけたア、お里のお土產何やつたア、ピッピヤ一ガラガラ、笙の笛エ、鳴らいて見たれば鳴らなんだアね んね子遊せ、おたからヤア。

○泣かんこつちや〳〵雀の子、泣くと鳥指が指に來るウ、泣かねば鷹匠が撫でに來る。

○天竺の叔母さんが、お子が無うて淋しかろ、二十日をつらまいて、元服させて髮結ふて、上下着せて出いたらば、隣の猫がチョクカイかけて、明日から內のお兄樣。

○正月の三日の日に叔母の處へ招ばれたら、竿にてかくいて、蕪にて指だいた、

もうと喰ふをと云ふたらば、眼向いておどいた。

○お正月どこ〳〵までいらした、コロコロ、山の下までいらした、お土產はなんぢや榧、や、勝栗、ミカン、コウジ、橘や、あまた釣つた串柿、犬のふんだ橡餅、猫の踏んだ、かい餅。

○泣かんこつちや〳〵、おたからヤ、明日はたからのお誕生ヤ、赤飯焚いてとゝそへて、大口魚汁かけてさら〳〵と、お箸がないてゝおむづかる、お箸は何箸柳箸、柳箸が嫌なら、かつぎ箸、寢んねヤねんねヤ、ほろゝんやー。

●同（河北郡七塚村）

○ネンネヤコロ、ネンネイヤ、母親の居らぬ間に、豆腐汁掛けて飯食はそかなん、母親は何處へ行かしたなん、母親は金山へ金儲けに、そーしていヤ、明日の

晩來てヤぞヤ。

○オロ、ヤコロ、、ペロ、イヤ、ネン〳〵唱名ジウサンゲ、懺悔が足らいで喜びの、喜び心を當にすな、當になるのはオンチヨクメイ、チヨクメイ聞いたら疑ふな、疑ひないのは信心じや、信心一つに參るのぢや、參るは彼尊の極樂ぢや、ナンマンダーナンマンダ。

●同（河北郡西英村）

○ネンネコさッしャいませ、寢た子はかはい、起きて泣くネンネ（子）つらにくいば子にあたる。

○ネンネヤコロ、ネンコロ、、我子かはいけりや、守かはいがらんせ、守を叱れ

○ネンネヤコロ、ネンコロ、、子守ひどいもんじや、冱塞の冬も、襷投げ置く隙

もない。

○ネンネヤコロ、ネンコロ、、お前のオカ、はどこへいかした、どこ〳〵山へ花折りに、一本折ッては腰に挿し、三本折ッては腰に挿し、三本折る間に日が暮れたネーンネン。

○ネンネヤコロ、ネンコロ、、向ひの山から狀が來て、誰に來いとの狀やいの、お前に來いとの狀やいの、お守は今年は遣られない、ライナン（來年）廿歳になッてから、着物のヒトヨ（衣單）もして着せて、馬買て鞍買て載せて遣る、ネーンネン。

○ネン〳〵コロリンネンコロリン、ネブッのもとがどこにある、此川上の山越えて、蓮の花やら花盛り、娑婆とちごて極樂や、ネーンネン。

○ネーンネヤ寢た間に、ヤ、（母親）へちえて（連れて）いかう、ヤーヤはどこ〳〵どこ

べいかした、金々山へ金掘りに、金が湧くやら湧かんやら、一年立てもまだ見えん、二年立てもまだ見えん、三年三月に狀が來て、其お狀讀んで見たれば、三人の子供をどうどした、一人はオジま(父叔)に預けました、一人は緣に附けました、一人はバオゴ(母叔)に預けました、木履や足駄は十二足、帶や子繰や十二筋、ネーンネン。

●遊戯唄

●たまご遊(同上)

○おじゃめ、おふたおふた、おみおみ、およう、なつてくりよとんけん、おじやめざくら、おふたざくら、おみいざくらざあくら、およふざくら、ひてしざくら

おなつさらり、一ッおぬけぬけた、おふたおぬけぬけた、おみがいれかへらん、およおぬけ、ひてしおぬけ、おなゝおぬけ、おみつこぼした、おつめ〳〵、つまんだ、あらいたや、ひばり、とんけん、まぬけ。

●尻まくり(同上)

○明日は朔日尻まくりやーはーやーやーろーヲ。

●鬼定め(金澤)

○鬼かいぼに、まじらぬもんな、風呂屋で、つーるんだあー。

鬼ことなすとき、右の如く大聲にて連呼し、同遊の人員を集むるなり。

○鬼かいぼー樣、芋の畠に息災念佛、お腹が立つたら、旦那の首を三つに切つて行きゝ戻りに花一本タアーテエーテーナームーアーミーダーブーツー。

人員も揃ひて彌々始むるとき「ケン」の代りに各自の履物を片足出してならべ置き一人片足にて有合ふ下駄を順次に唄ひつ數へ廻すなり、其終局に當りたる者を鬼とす。

○かくれんぼーに、かくれ笠、四十や、四五笠、あぶらごけ、たごけ、さむらひ袴、はいて、乳呑んで、ぐつとせえー。

是れは隠れ鬼ごとをなす時鬼を定むる文句なり。

●百足鬼ごつこ（同上）

○ヂン〳〵百足、千年たつた百足、オットの子は大事、大事〳〵。

●あてこに、こてこに（同上）

○あてこに、こてこに、誰れにあたらうや、まだしよがしれぬ、池のふちに、茶碗置いて、あぶなみやつこつた。

數人の子供に一の品物を與ふる時用ゐる唄にして、唄尾に當りたるものに授く。

●からつしよ（同上）

○からつしよがしよが、みそーでわいたわいた、ぶんやのむすめが、をとことられて、はづかしないか。

子供二人肩と肩を組み合はせ廻りながら唄ふ。

●影燈籠遊び（同上）

○何々さんなアにしる（鬼になりたる者の名を呼ぶ）行燈影にしる、可愛男の帶くける、アリヤドン〳〵、コリヤドン〳〵、後ろの影燈籠どうなつた。

●女兒が狐拳を始むる時（同上）

○こらぼどの、三重かさなるお重箱に、おもすびこもすびつめ込んで、叩き牛蒡

に胡麻ふりかけて、推茸さんに松茸さんが、あんまりおしくて、おしやしやのしやん。

●動物の唄

雁の行くを見て。

○雁や竿になれ後の雁は先きになれ、先きの雁は、後になれ、それーが、いやなら扇一本置いて行け。

烏の柿をもぎ食ふを見て。

○烏、かーか（啼聲）柿もんで、くれや、あもても、だんない、澁てもだんない中の大いがを、よりだいて、くれや。

鳶に鼠を與ふる際。

○鳶〳〵、ねず（鼠）ひらんか、ねずひらんか鼠とつてぶちあぎよ。

銃獵者を見ては。

○向ひの山に、鹿が啼く、暑いて啼くか、寒いて啼くか、へもじ（腹空）て、啼くか暑つもない、寒もない、へもじ、もない、四十四人の、かりふど（獵者）して、おつとり廻いて撃つわいのう。（金澤市）

○此山奥に鹿が鳴く、何う言うて鳴くか、空腹て鳴くのか、さむして（寂しくて）鳴くのか、さむしも空腹もなけねども、始終四人の狩人が、おッ取廻いて鳴くわいの（河北郡西英村）

蛙を半殺にし穴を穿ちて入る、毒だめ又は山椒の葉を覆ひ被せ、小石を載せ石を手にして打ち叩きつゝ。

○ぎやんどん（蛙の）、ぎやんどん、何つ何つ死んだ、よんべ（夜作）糟食て、けさ（朝今）

とう（早う）死んだ。

蝙蝠の飛廻るを見て。

○こうもりこー〳〵、我が身を隠すな、田圃の鼠のばけたがや。

蛇の止り居るを見ては。

○とんべのおしろに鷹じよが居る、あッち向いて見され、こッちむいて見され。

螢を捕ふる時は。

○ほーたるこ〳〵、ほーたるこに水のまそ、あッちやの水は苦い、こッちやの水やあまい。（金澤市）

○螢來い露飲ましよ、彼方の水は苦味ぞ、此方の水は甘いぞ、螢の〳〵食ひ物は山の〳〵穀斗坊、甘皮剝いてはがりがり、澁皮剝いてはがりがり。（大聖寺町）

黄昏に烏の巣に歸るを見ては。

○あとの烏やささになれ。

○烏はよ往け、權現堂がしまる。

權現堂の森には烏の巣多くして市中の烏悉くこれに栖めばなり。

又烏と蛇とを見ては。

○烏かーかー、かよむさの屋根に、とんべとーとー、とよむさの屋根に。

雁行を見ては。

○がんがん竿になれ。

●雜謡（金澤）

下駄を投げて其表裏に依りて吉凶を卜する時に。

○鰯の頭は信心から〳〵、どッさり。
○火ばゝ〳〵、火一つくれんか、火はまだうてぬ、向の山に火がちよろ〳〵見える。

小僧(寺の童僧)を朝ける時。

○小僧や〳〵、何つ腹ふくれた、盆と正月おみようこ(講命)の、ようさり(夜)〳〵。

●同(金澤)

○明日はお立ちやお名殘り惜しや風のまゝなら吹きかやす。
○可嫌なお客の投げ酒杯は、朧月夜で星がない。
○ひやかし男と疊の緣は、淺黄染より紺がよい。
○ひやかし男と雪踏の金は、金のあるまでちやら〳〵と。

○酒杯ほしさに云ふのでなけど、酒杯や疊の模樣でない。
○さいた酒杯や中見てあがれ中は鶴龜五葉の松。
○お酒のひ人ア皆神樣や、お酒あがらぬ神はない。
○酒の肴に茄子がよかろ、色もやさしや小紫。
○梅干の實やとて、あなどりしやんすな、鶯啼かした事もある。
○わたしとあなたは杏のたねや、末は夫婦となるわいの。
○傘の骨の數程馴染を持てど、□□□□□□のは主一人。
○すいたお主が病氣と聞けば、ならぬ介抱をして見たい。
○梅は八重咲く櫻は七重、なんで朝顏はひとよさく。
○山へあがれば霧島躑躅、見れば折りたい契りたい。

○淺岡山から鬼や出た昔、今は世がよで女郎がでる。
○櫻三度咲く吉野の櫻、椿や二度咲く秋と春。
○秋が來たやら鹿さへ鳴くに、何んで紅葉が色づかん。
○舟のせんどとつばくら鳥は、いつも春來て秋もどる。
○二十過ぐれば奥山躑躅、咲いて居れども人が見ん。
○お月出てやに、なんで道ちや暗い、お月や木の影松の影。
○主の思は石山なれど、石がこわれりやじやれとなる。
○主は今頃起きてか、ねてか、思ひ出いてか、わすれてか。
○山へあがれば、棘が、とめる、いばら、はなせよ日が暮れる。

○若い人やになんで氣が浮かん、川の石さへ浮しや浮く。
○來ては、ばた〳〵雨戸の外に、心まよはす、南風。
○こひ（戀）の、ぢは、うみ（海）油の雫、をちりや、ひろがるどこまでも。
○思て、かよへば、千里も一里、遇はずもどらば又千里。
○昔馴染みと、つまづいた石は、腹が立つても、あとを見る。
○いろは、四十八ある、その中に、いや、の、や、の字がなけな、よい。
○身は此に骨は野山に、さらそが、まゝよ、拾ひ集めて、添ふて見しよ。
○家は嚴しく、外へは出れぬ、猫さ、けつこ（結構）な、家根づたひ。
○ふみ、は、やりたし、番地は知らん、白紙手に持つ目に涙。
○顔へ紅葉の兩手を當てゝ主へ操を立田川。

○憎くや、主をば待夜の首尾に、雨を呼ぶのは鳴く蛙。
○義理につまれば鶯さへも梅を離れて籔でなく。

●同（河北郡四英村）

○指江牛蒡に狩鹿野が煙草、山田ナンバで氣屋大根（指江狩鹿野は共に四英村の内）
○思ひ出いては寫眞をながめ、何で寫眞がものいはぬ。
○思ひ切らんせ、切らねばならぬ、こゝはあなたの切れどこや。
○一夜泊りのこい山吹は、花が咲いても實がならぬ。
○來るか〳〵と、濱へ出て見たら、濱の松風うたばかり。
○啼くな鷄さわぐな烏、あけりや、お寺の鐘が鳴る。
○嶋田見りやたゞ、ありやそか〳〵と、外に島田がなけにやよい。

○何か言やたゞ、江戸いく〳〵と、江戸は遠いがいね百二十里。
○どうでかうなら、二足の草鞋、さげてはいたり、はかせたり。
○どこのやつやら、大根種かついで、今朝もこぼたが又こぼた（こぼた來ヨッタといふ程のこと來たことたい）
（やしんでいふなり）
○辛抱して呉れ、辛抱が金や、辛抱しる氣に、かねがなる。
○あひに來れど、戸はたゝかれず、歌の文句でさとらんせ。
○だてをこいても自慢をこくな、自慢こくよな縹致でない。
○おのれ覺えとれ、一生忘れまい、死んで墓松のたえるまで。
○アンニヤマ、こつち向かんせ、旨いもんをあげる、密柑皮剝いて實をあげる。
○オマンはどこやいね（オマンはおさんの略言）七尾（能登）かセメか（セメとは地ならむ）セメに鰛がすけるそ

な（掬へるそうな）

○あの子はケシな子や（可笑しいれ）わし見て笑て、私も見てやろ、笑てやろ。

○私はひどいもんぢや他所から來とりや、親が在所に居らぬ氣か。

○死んでゆく時や、如來樣たより、娑婆に居る時や親たより。

○私しとお前さんは出水い泡ぢや、こゝに居るやら、流りよやら。

○鯉の瀧登り、どういうて登る、山を川にしやうといふて登る。

○どうかこうかのわけさへわかりや一人寢もせぬ、寢さしやせぬ。

○いこか茶屋町、もどろかケ町、こゝに思案の二バン町。

○いやぞわいたぞ泣く子の守は、親に聞える氣の毒な。

○なんぼ泣いても私子の泣くに、お花畑のきり〳〵す。

○藥師山から、よざや（浴揚）を見れば、惚れた病はなほりやせん。

○お醫者さんばも有馬の湯でも、惚れた病はなほりやせん。

○稽古相撲なら負てもやれど、今日は日にちで負けられぬ。

○いこか倫敦、戻ろか巴里、こゝは思案の佛蘭西國。

○種は極樂、菩提寺は地獄、いまで名所は池ケ原（種菩提寺池ケ原共石川郡種谷村の内）

○アンニヤ（姉）も寢ぐつしやい、あの山見さんせ鯽や米かつ（米なつくこと）木の枝に。

○櫻三月、菖蒲は五月、人の心は二三月。

○さいた盃、なか見てあがれ、中は鶴龜五葉の松。

○イショへいかんせな（行かんすな）御門の堤、いけば蛇が居る、のしが居る（御門は河北郡種谷村の内ノシとはメのこと）

○御門堤に鴨なら三羽、いやぞコンマの長坂は。

○わたしやどうでも、あなたのまゝじや、亂れ柳も風のまゝ。

○千兩箱不二の山程積んでもいらぬ、わたしやあなたの氣に迷た。

○およそ世界にランプがなけにや、わしはアンドでクラクする。

○アンニヤマ(姉)どこいく、手に花つまんで、明日はお父の四十九日。

○惚れて居れども、言出しやつらい、どうかそつちから言つて賴む。

○來いといふのを來るなと書いて、筆のあやまり、手の如才。

○あれやなさけや、オチヤン鉢(鉢の一種)わらいて、買つてまどをか(買て辨償しやうか)手をすろか。

○つらいつとめを半年立てた、あとの半年や夢の間や。

○どうぞ神さま、こゝ聞きわけて、二度と賴まぬわいの、今一度。

○わしはひどいもんぢや(つらいもの じや)田中のギーヤワズ(蛙)、人に踏まれてギンヤオギーヤオ。

○お母堪忍々々アタがわるい、學校もどりに子が出來た。

○仕事のりやそゞ肩カイヤおこる(肩がこること)小豆餅見りや喉が鳴る。

○アンニヤマどこいく、でかい腹(大なる腹)かゝいて、加茂のナンドへ身を投げた(加茂は石川縣河北郡東英村の內)

○おのれ覺えてれ、たゞ置きやせぬぞ、闇の夜のさりさし殺す。

○森は股引、鉢伏脚年、山田カフカケ氣屋草鞋(森鉢伏は共に河北郡金沢村の內、山田氣屋は同郡西英村の內)

○今夜こゝに寢て明日の晩はどこ、あすは田の中畔枕。

○お月さまさへ桂と二人、わしは山道たゞ一人。
○思ひそめ川渡らぬさきに川の深さを知らなんだ。
○あの子こいにして死んだ時やどうしる、死なば野山の土となる。
○こいのつやぶり油のしづき落りやひろがるどこまでも。
○オッサマいこおらタアタも連れて（オッサマは叔父さんの如しタアタは娘自身たいふ）つれは南部のはてまでも。
○娘もろたら婿はしござろ、竹につぎ木がしとござろ。
○唄はうとたし、唄のふしや知らんし、人のうとがとつけてうと。（唄ふ）
○唄は袂に千でもあれど、出いてうとはにや人知らん。
○アンニャマいこなら、タアタも連れて、ッレショあとから呼びにくる。

○四十や四十やと今朝まで思た、三十九やもんの、はなやもんの。
○角力取の腕は身上で、からだが祿や、行すい先や我家で女郎（妓藝）が妻。
○ござれだいじない、十日に一度、だれがよこやを入れたやら。
○傾城させるよな、ひらけた親は、なんで乞食をさせなんだ。
○逢ひたかろぞね顔見たかろね、おふて話もしたかろね。
○一夜□て見て□□がよけりと妻と定めて、また□□せう。
○西も東も南もいらぬ、まことあるならキタがよい。
○オッサマ、アンサヌ（弟サヌ兄サヌ）といはれる人が外の軒端に立つものか。
○今の若い衆は妻戸の醫者や、寐たか寐んかの脈を見る。
○朝酒呑むよなドウラクなれど、なんでドテラが縁がない。

○男ドンダ（怠惰ノ）は江戸へでもやれど女のドンタはどもならん。（致し方がない）

○山中、山代、粟津の湯でも（山中山代は加賀江沼郡粟津は同國能美郡にある名高き温泉）惚れた病はなほりやせん。

（此唄（六）（七）と似たれとも語句の異なるを以て掲く）

○うちのお母は（我家のおっかさんは）金米糖おかゝ甘い中から角がでる。

○土方さまやと知らずに迷た、錢のないのに氣がついた。

○津幡弘願寺の鼻の毛がながい、オンマドンボ（蜻蛉の一種）が巣をかける。（津幡は加賀河北郡の名邑、弘願寺は津幡にある巨刹、此唄は同寺僧の不覺を罵りて一時流行せしもの）

○こゝはかうでも五箇山さぶい（五ヶ山は越中礪波郡の内さぶいは寒いなり）袷やりたや、ことづけて

○あんなやつ見て人間じやと思ふ、言葉かけるが今初め。

○ばゞさションベンロロロ雀がのぞく、一羽二羽三羽四羽だらけ。

○來ては門に立つ、のぞいてはもどる、あんな心底を見りやかわい。

○親方顔してヨコザにねまる（横坐に座するなり地爐の一邊を横坐といふこと）うちへいきや（我家へ歸れば）ランプのホヤの掃除。

○惚れてつまらぬ旅しる人に、末は烏のなき別れ。

○いこかもどろか宇野氣（加賀河北郡金津村の内）の茶屋に、一人娘にヨバイコや。

○お酒呑む人ア、皆神さまや、オミキわがらん人もない。

○ダラヤダラヤといふもんはダラや、ダラが家持つ世帯持つ。（ダラは痴呆なり）

○東京生れの横濱育ち、親は人力車の車ひき。

○おまや（お前の略）百まで、わしや九十九まで、共に白髮のはへるまで。

○角力をとるなら名乘をあげてセキをかたねてもどらせん。

○あの子よい子や、よい縹致の子や、あの子育てた親見たい。
○稽古せいでもつよい時やつよい、島田まかいたこともある。
○檢査してからまだ帶とかん、帶はとけども氣はとかん。
○惚れた證據にあれ見やしやんせ猫が鼠を睨むよに。
○若い人やに言葉があらい、同じ言葉をすなやかに。
○夜の夜遊、朝寐のもとや、世帶知らずのだて男。
○あの子きなりや兩手に花を、わしは片手に仇花を。
○かわいがらんせ娘と馬は、どこのいづこへ賣れるやら。
○藝者しやうより木のぼりさんせ、落て死なんせわしや見とる。
○思ふて通ふたら水かけられた、おれの思を水にした。

○一里二里ならあきらめあれど、わづか二三町がまゝならぬ。
○ウジヤリ〳〵とワランジはいて、おじやれセドは石原小石はら。
○女郎のまことゝ玉子の目鼻、千に一ッもないものや。
○女郎のなくのと雲雀の啼くは、啼くはなけども空で啼く。
○いやといふのをむりから入れて、いれて泣かすは籠の鳥。
○ちうとはらんせ、としはんでもない、わしをあげやへ賣りやしやんせ。
○うとて出たわの、ヤスサエモン（人名安左衛門ならんか）の兄サ、まわす糸わくやめて聞く。
○來ては冷かし風の子お客、どこのニッシンボが生んだやら。
○姉も妹も手拭帶で、だてゝしるのか、持たぬのか。
○喧嘩しやうなら氣のきいた喧嘩、シラミシブリが血で染まる。

○戀の病して寐て居る時は、苦い煎藥飲め〳〵と。

○角力で投げられ御山（加賀金澤の古名）で振られ、そこで男の身が立たぬ。

○向ひ山見りや雪チラ〳〵と、いとし兄さまが氣にかゝる。（兄さまは我兄の事にあらず情夫をさしてしかいふ）

○山へ行きやたゝ炎がとめる、いばらはなせば日が暮れる。

○かわい子なれど、やりますほどに、のちようまわしてつこてくれ。

○一天萬乘の王さんは、二には日本をはじまりて、三には土廢せられ、四には四ッ足くにならべ、五ッはいせんとはらをくむ、六ッはもやにかみをきる、七ッはなんでも錢をとる、八ッは屋敷を賣はろて。九ッこゝには居られんと、十ヲで東京までいつたそな。

○こなたのロウジ（庭園）のつくり松の枝には錢がなる、二の枝にはかねがなる、三

さがりた其枝に鶴がふうふの巣をかける。

○十七八の姉さまが（我姉にあらず娘盛りの他の女を指していふ）肩に手拭うちかけて、カスリの前掛（前垂なり）シャンとして糠袋を手にさげて、これ〳〵姉さま、どこにゆきやる（何處へ往きます）わしは風呂屋へ參じます、あなたのすきなが何じやいの、饂飩か素麥か素麵か、たべるに雜作はなけれねども、あとのしまつを誰がする、あとのしまつは、わしがする。

○かわいらしやかわいらしい、お十二三の小娘が、鬼のかなめに池を掘る、池のメグラに（圍池ノ周）田を開く、其年一年上作で、一鎌刈こみや千と刈る、二かま刈こみや二千かる、三かま四かまは數知れでかッてしろいて（搗き舂き）米にしる、俵になをせば不二の山、飯にたけば、とうのめし、酒に造れば伊丹酒、其酒頂戴しる

人は、持命も長かろ末繁昌。

能登國

●鳥逐歌（鳳至郡穴水村）

○苗代田のおんばさ、鳥逐うてくんさいせ、鳥は何鳥、小鳥、ひるの中の燕、逐うても〜立たん、ホーヤーホヤホヤ。

●盆踊唄（同上）

○蒸汽や出て行く、烟がのこる、のこる烟が、ヤンサイコノー、癪の種ナア、ヤレ癪の種、殘る烟がヤンサイコノー、癪の種ナア、アイヤサカイヤカサ。

●手鞠唄（川島附近）

○せん〜先殿乙娘、顔は白壁眼は水晶、今度目お嫁に行く時は、朝早よ起きて

窓開けて、窓の明りに髪結つて、爺さん姥さんおひんなさい（起きろと）お茶もチン〳〵沸いて居る、ドン〳〵叩くは誰様や、千松米屋のお爺様、今時何んしにお出やね、せきだ（雪駄）が替りて參りました、雪駄の緒は何の緒で、ソレ〳〵緒のその緒の、猫を逐ふとてしき（閾）に躓いて、スーリトーントスリトント。

○向ふの小寺を誰れ建立た、八幡長者の乙息子、彼の子好い子よ美麗な子よ、妾に彼の子を呉れたらば、雪駄履かしよか足袋履かしよ、さんによ〳〵高價い豆買ふて何んに爲る、高價い豆買ふて船に積み、船は何船關東船、關東土産に何品貰ろた、髢七掛八筋、誰に取らしよと購ふて來て、お龜に附與しよと買ふて來たお龜は死なれて今日で六日、明日は七日の墓參詣、墓の周圍に松三本、松の中には鳥三羽、眞實じよう〳〵の鳥ならば、水にいをから岩にいはなスリトン〳〵。

●同（風至郡穴水村）

一ツトサーひとめも知らさん戀がする、戀に窶れて居るもない。
二ツトサーふたまの濱に網を結く、網を結かいでごり（魚の名）を抄く。
三ツトサーみまい此世を持ちながら、袖に涙を絶やすまい。
四ツトサー夜まはり座敷に一人寢ておもよしこもよし寐て果す。
五ツトサーいつもの如くに夜が明けて、まだ夜が明けんに鷄が歌ふ、朝の烏もカア〳〵と。
六ツトサーもりふか結んだ玉椿、雨風吹かずにもどされた。
七ツトサー何より寶を手に据ゑて、後生を願はんひとあみだ。
八ツトサーやはりやさしや背戸に立つ、背戸に立たずに門に立つ、門から背戸ま

で砂を撒く。

九ツトサーコリャ〳〵待たんせ紺屋さん、肩から裾まで梅の花。

十ヲトサーとをほやれんげの鐘が鳴る、今鳴る鐘は初夜の鐘、後鳴る鐘は後夜の鐘、初夜後夜の鐘が鳴る。

十一トサー十一とんだの蛙めが、枕の下のおとぎりす。

十二トサー十二の川原へ船が着く、船に艪附く擢も附く、チョイト千衝いた。

○向ひの山の林の木を、枝々下いて薬椀で、前後つまいで長刀、長い刀差いてどこいかる、馬せめ馬場へ馬せめに、御馬のせめよもようござる、手綱の持よもようござる、鐙の踏よもようござる、高い處が七ところ、低い處も七ところ、高いとこから低いとこまで、コロリ〳〵と落ちさんした、差いとる刀で胸突いて、竹

の刺で足突いて、松葉の穂先で手突いて、醫者も呼ぼかね、醫者もいや〳〵、薬も上よかね、薬もいやいや、おれが死んだら赤い棺（赤い棺とは美しき棺といふ意）買て入れて呉れ棺の周圍に布捲いて、布の周圍に松栽ゑて、松の周圍に砂撒いて、松の心にたかとめて、シンマチコメヤ（新町米屋か）と云ふて下んせスットントン。

○向ふへ見えるは島さんないか、ヤーレ島さか見違ひました、下に白無垢、間着の綸子、綸子緋綸子ひだやの帶で、たぐりなんぞは江戸紫で、髪を結うて、すけさを頼んで、櫛や笄ばらりと挿いて、百目綿帽子ふわりと召して、傘はジウガサ締緒の淺黄、淺黄足袋穿いてヤツヲの雪踏、雪踏しやら〳〵行振見れば、おれを殺すか助けてたまへ、これは醫者せず薬箱持たず、死のが生ようが此方や構はんストントン、チョットほりあげて、丁度五百衝いてスットントン。

○向ひ通るは熊野道心、肩に掛けたる帷子、肩や裾やの梅の折枝、腰にごりはしそれはし、それはしから、はやるものとて、トンビコツケラコーで、こまくら、このまくらは何所に打たれた、吾妻街道のキョウキョ町、姉よりも、妹よりも、中の妹は、二ほん手利で手こえだ、手利ならこそ、五つには絲をとり初め、六つには六機織初め、七つには綾や錦を織初め、八つには屋敷を廣げ立て、九つ此世の事を治めて、十には殿御に遇初められて、お十一には花のやうなるお子をもとめて、十二に關東へ參らすて、關東姿はなんぼ優しや優しや、優しけりやこそ、下に白無垢上には紅差べんぬのこ、も一つかやいてソレトントン。

○だいじまの、お筆まの、お手鞠を、ことや今日、しゞかや四十日、お借申して慥にお渡し申します。

○こんや（此家の）初まは大家な初ま、年も行かんに馴染を持ちて、馴染誰れやと尋ねて見たら、すこし荒屋のブョンサ（武右衛門さんの訛りたるならん）ないか、雪駄チャラ〳〵紋羽の脚絆、連て行くなら粟ケ崎までも、枕並べて寢るばかり、寢るばかり。

○みやの山から池底見れば、ひぼが七筋やが八筋、青い蝦蟆が十二筋、十二筋ヲツトントン。

○枕頭のインニョムサ、筍一本、赤いが（着物）が十二枚、黑いばも十二枚、タータ（少女自らいひ又他人の娘をらしかいふ）の着物も十二枚、家の子供に着せりや、隣りの女親が窘める銀の笄落いて、宿屋の女親に拾はれて、錢なら一文、金なら一枚。

○おらの姉まは手鞠上手で、城へ呼ばれて、城の座敷に二千八百衝いて落いて病出いて、醫者を呼ぼかや、產婆を呼ぼかや、醫者もいや〳〵、產婆もいや〳〵、

トント佛となりましよ。

○松葉で百衝いた、松葉で二百衝いた、松葉で三百衝いた、松葉で四百衝いた、松葉で五百衝いた、松葉で六百衝いた、松葉で七百衝いた、松葉で八百衝いた、松葉で九百衝いた、松葉で千衝いた、千の都は落すお落さな、チヨピヤクチヨーピヤク、チヨイト千衝いた。

○十、二十、三十、四十、五十、六十、ナーヤ〳〵九十、百（元へ戻る）

●子守歌（鳳至郡穴水村）

○ネンネンコロリン、ネンコロリン、おらの赤子が寢たら、鯛買うて祝うて、あたり近所呼うで、在郷中配つて、何祝と聞いたらば、おらの赤子の寢た祝、ネン〳〵コロリン、ネンコロリン。

○ネン〳〵コロリン、ネンコロリン、隣のガーと、おらのガーと、法僧破りの相談ぢや、早う寢所を變さんせ、ネン〳〵コロリン、ネンコロリン。

○ネン〳〵コロリン、ネンコロリン、赤子が母親どこいつた、向ひの山へ花折りに、何花折りに、黄金金の菊の花、一本切つては腰に挿し、二本切つては振擔ぬ三本目に日が暮れて、歩けど〳〵宿がない、あちらの方を眺めたら、あちらの方に火が見える、こちらの方にも火が見える、あちらの小宿に泊らうか、こちらの宿に泊らうか、あちらの小宿に泊つたら、蓆が短こて夜が長て、あかつきよいに出て見たら、雛の樣なる女郎達が、まゐらんか〳〵サコサブロ、肴がなうてまゐられぬ、そこらの肴は何肴、石の下のカワラべと、茨の中のツク〳〵と、煮て置いたられば、隣の嫁さんちよつと來て、旨いと云ふてはちと食ひ、辛いと云ふて

はとち食ひ、二杯三杯とち食て、おらの茶釜も呑乾いて、隣の茶釜も呑乾いて、おらの閑所（厠のこと）もグワーチヤグワチヤ、隣の閑所もグワーチヤグワチヤ。

○ネンネーヤ、ネンネセ、寢たら母親とこへ連て行かう、起きたら怪物に嚙ませう、ネンネンセーヤ、ネンネセ。

●同（鳳至郡穴水村）

○赤子泣くないヤー、ネン〳〵コロリン、タンコロリン、赤子が母親どこいッた赤子が母親花折りに、どこーの山へ花折りに、向ひの山へ花折りに、花は何花躑躅花、一本折りては腰に挿し、二本折りては腰に挿し、三本目には日暮れて、宿はどこやと問ふたれば、この向ひの小屋掛で、蓆は狹し夜は長し、曉起きて空見たら、天氣が好うて樂みで、向ひの方を眺むれば、雛の樣な女郎達が、赤い前掛

ちやんとして、杯さんて（提げて）酒さんて、酒の肴は何やと問ふたれば、稻葉にシをうる（日を送る）ひり〳〵す（蝗のこと蝗斯に）隣の嫁とおら嫁と、旨いと云うては摘み食ひ、辛いと云ふては、おらが茶釜も呑乾いて、隣の茶釜も呑乾いた、二人の所爲を眺めては、赤子の泣くのを知らずして、待ちても待ちても待ちてもまだこない

●月の唄（鳳至郡）

○お月さん幾つ、お十三七つ、そりやまだお若いこッちや、赤子生んで子生んで乳母さに抱いて、油買ひに遣つたらば、油屋の庭で、とすべつて、轉んで、油一升反いた、其油どうした、犬が嘗めてしまうた、其犬どうした、撲殺いてしまうた其皮どうした、太皷に張つてしまうた、其太皷どうした、かちきぴいて（燃やすと）しまうた、其灰どうした、麥に撒いてしまうた、其麥どうした、今朝の嵐と昨夜の

嵐で、バッバとたつてつた。

●動物の唄（風至郡穴水村）

○螢來い〜〜〜、だーんこせ、結んだ、解いた、小枷にかけた、彼方の水は甘ないぞ、此方の水は甘いぞ、竹の筒で露呑ませう。

○ホーミ螢來い、あんたんばゝから潜つて來い、落るなや、落ればこばんの三がいで。

○烏の首や長いか、鷺の首や長い、鷺の首や長いか、鷺々わりや首や（汝の首は）何で長い、空腹て長い、空腹けりや田打て、田打ちや泥つく、泥つきや洗へ、洗や冷たい、冷たか煖れ、煖りや熱い、熱けりやずりわがれ、ずりわがりや蚤や食ふ、蚤や食たら捕つて嚙め、捕つて嚙めどりや日が暮れる、日が暮れたら行燈點せ、

行燈點そうにも油がない、油がなけりや買て來て、買て來うにも錢がない、錢がなけりや借て來い、借て來うにも貸人がない。

○向ひの山に、猿が三疋下つた、たゞも下らん脱肛出いて下つた。

●雜謡

○昨夜見た〜〜地獄の夢を、兎は餅搗く閻魔はちぎる、鼻缺地藏が喰ひに來る、われも喰ひたか手傳せ、手傳しやうにも襷がない、襷がなけりヤ、隣へ行つて借て來い、隣の婆さまお茶婆さ、缺餅燒くてゝ臍燒いて、其手でお釋迦の顔撫でた釋迦臭いて、鼻撮んだ。

○一が一、二が二、三左衞門が柴刈つて、五月の五日、ヒチベタ（尻のこと）蜂ヤ刺いて、苦にして十日寢た。

○中居見て來て穴水見れば、あなゝか（穴の中にて僻地といはんが如し）なれど、月に三度の市が立つ（穴水は月々三度の市の立つ中居には立たず）

○鹿波神輿さま、いとしはないか、菰にまゐけて七海屋の倉に横に寢させて金貸せ貸せと（鹿波は鳳至郡外浦の漁村にして中居の近傍なり、七海屋は川島の豪農にて今もあり、歌の意は鹿波は貧村故神輿までを七海屋に質に入れて金錢を貸して呉れといふがさて〳〵貧村なるかなとなり、但し實際此の如きことありしや否を知らず）

○身上してこそ上田の小袖、父爺ヤ薦被て門に立つ、門に立ときヤ、こうしがもみぢ。

○雪はチラ〳〵降る、大丸傘翳して、手に下駄持ちて、おせつさんがお歸りヤと戸を敲く。

○昨夜の搔餅煉れたら、持て來い、小豆で煮臭い、黄粉で持て來い。

○山に床とりヤ木の根が枕、落ちる木の葉が夜着蒲團。

○戀し小川の水飲んだかた、腹が病めをすニゴ〳〵と。

○男生だんとて放蕩なさる、女郎の子やとてお茶一杯呉れん。

○おらかたの奥樣夜中に泣出す、鶏入らんさうな。

○土方鰥夫に買はれたごけが、親の罰とて諦らめた。

○背戸に柳の木、門口に柚の木烏はとまらぬよさはない。

○烏何で啼く長兵衛の屋根に、錢も持たずにカホカホーと。

○同じ女郎でもセンゴクダンの女郎は、頭トッチンコ（小さきこと）で尻大や。

○七つ八つから秣苅習て、親に買て貰う鎌ばかり。

○雉の牝鳥ヤ柃（「ちやかき」は「さかき」の訛にて榊なれども富村にては柃をも「ちやかき」と云へり柃は山谷の榊の一にして高さ低く葉は茶に似たり、狹くして長く鋸齒あり、花は少

さくして白く臭氣めり、これを今は實の柿に（かへて神などに奉るその「ちやかき」も柿なり）の下に、卵捕られてボト〳〵と。

○面白いわいね上（京都の本願寺を指す）參る道は、參る衆もある下向（人歸る）もある。

○禿た頭に鮪ひいて見れば、鮪は喜ぶ、禿は腹立てる。

○おどれ（已れに同じ）覺えとれ、此次は闇ぢや、川へたゝみこんでチアブムアブーと。

越中國

●田の草取唄（礪波郡）

○たるじさんの嫁は、鹿の子の振袖で、畑もよく植ゑ、イヤサイーヤサ〳〵〳〵

○己らが友達ちや菜たねの花よ、なん〳〵畑けのかたがり畑の、茶の木の根つこに黄いろく咲いたり、菜たねの花よ、さかり過ればちらほらよ、チヨイト〳〵。

○今年は豐年穂に穂が下がる、早稻に五升なる中稻に六升、末に晩稻はあら箕で量る、豐年萬作祝ひなせう、イーヤサイチヤ〳〵〳〵。

○馬は六歳七ッはさかり、人は二十一二を盛り、チヨイト〳〵。

●船唄（伏木放生津）

○船に乘ても炊きにやのるな、一に朝起、二憎まれて、三さべられ四に叱られて五には船中の椀皿洗ふて六にむりな事云ひつけられて、七ッ泣いたり口說いて見たり、八ッやかたで其日をくゝられ、こまやかにまはれとおつしやる、十で艫に出て大泣き小泣き船頭さまには怨みはないが、勢出いて着きたや、岩瀨港で譽るぢゃないが、出船千艘入船千艘、二つひよろ山一花盛り、二にはにはかにチョロをおろいて三つ港へ八船なされ、四つ繼いで錨でとめて五つ入り舶樽數貰うて六睦まじく、かた船呼んで七つなつみ衆の小供を呼んで八つ屋形で太鼓ヤ三味で九つこやどはさて賑やかな、十をで問屋を繁昌で暮す。

●同

○松前殿樣鰯の茶漬、よつてゆるりと御茶でも飲まんせ、世間話をさせておくま

いか、彌陀の本願喜びなされ。

●盆踊唄（磯波郡西山家）

○今夜夜はよし、踊るまいか皆の衆、ハイヤーサカサと囃いてだのだ、（音頭）ハイヤーサカサ〳〵（合唱一同）ア、是りや何うぢや、千丁萬丁の田の草取りて、千駄萬駄の米とり上げて、千戸萬戸の倉立て並べ、千艘萬艘の船をば造り、昔し長者の後より娘、稼で貰ふて子寶ふやし、兄は龜なり妹は鶴よ、諸國諸大名得意に持て、家の榮えは松より高く、金の出入は池より深く、ハイヤーサカサ〳〵（音頭）ハイヤーサカサー〳〵、（一同合唱）東をながめりや、立山地獄谷、西をながめりや、西方阿彌陀樣、ホウーイ〳〵（合唱）何なりとすれば雲かゝり、雲は邪見でなけれども、我身は邪見で拜まれぬ、ホウーイ〳〵。

○エ、ためしに魚釣る太公望、義經家來の武藏坊、入道の突くのはドンつくぼう
饂飩に素麵とちめんぼう、量りの目には正直ぼう、住吉踊 願人坊、鞍馬の山に
は僧正坊、夏來るとんぼは赤とんぼう、子供の遊びは隱れんぼう、細そても强い
は樫の木ぼう持て放さぬしんないぼう、盜人の爲には要心ぼう、戸口に立つのは
道心ぼう、金を取り出す大泥ぼう、男この持つのは六寸ぼう、有ても呉れぬは横
着ぼう、富山のこつちの安養ぼう(地名)富士のあつちの常願坊(同)地藏に觀音南
三寶、番頭にや辛抱、雨戸にやせんぼう、擔んで走るは小便ぼう……ホウーイホ
ウーイ〳〵。

●神樂踊 (五箇山)

○思ひと戀と笹船に乘せりや、思ひは沈んで戀は浮く。

○波のやーまを遁れ來て、薪樵るてふ深山邊に、烏帽子狩衣脫棄てゝ、今は越路
の杣がたな。
○向ひの山に啼く鵠は、鳴ては下り、鳴ては上り、朝草刈の眼を覽す。
○向ひの山をかづことすれば、荷縄が切れて、かづかれぬ、かづかれぬ。
○踊りたか踊れ、泣子をおこせ、籠は窓のもとにある。
○向ひの山に光るものは何ぢや、星か螢か黃金の蟲か、今來る嫁の松明ならば、
差上げて燃せやせをとこ。

●手鞠唄 (中新川郡水橋町)

○おらはトッサン(父親)金山で、金が湧くやら湧かんやら、一年立ても狀が來ん二
年立ても狀が來ん、三年三月で狀が來た、狀のうらわを讀んで見たら、三人の子

供をどうしやッた、一人はオバマ（弟の嫁）に預けました、一人は縁に附けました、
縁に附けたらソーゾク（葬束）は、赤い葛籠も七葛籠、鬱金の小袖も七小袖、帶や手
繰や十二筋、下駄や木履や十二足、笠や傘十二蓋、鋏や毛抜や十二挺、これ程仕
立てゝ遣つたれば、お前は出てこと思はんな、私や出てこと思はねど、あつちの
男が秋の空、丁度卸いて千衝いた。

○向ひの山に火が見える、月か星かありや何ぢや、今來る嫁さの松明や、松明と
ほされやせ男、やせた男の前髪は、切ッた切口はながしる、はなが何ばな、京で
京ばな、モ一つかやいてスットントン。

○今度加賀樣お江戸へお立ち、オカンマブレは誰々樣や、一にナイヅに二にカッ
ツモンで、三にさかさまイシボトはげた、はげた紫はいま〳〵ネンボ、ネンボせ

うやらことつけしよやら、橋の詰から二軒目の茶屋に、茶屋の亭主はヤマメと申
せ、ヤマメ可愛やオサンと申せ、オサン可愛やゴカンのソエに、前の磧へサラシ
にあうてあうた男は馬方なれど、絹の股引天鵞絨のケハン（脚絆）足袋や甲掛鼠に染
めて、モ一つかやいてストントン。

○一山の二山の深山の奥のタイフクは、船に積んだら今卸すはや卸す、金襴緞子
の帆を揚げて、下は白壁高は赤壁、丁度卸いて千衝いた。

○おらは向ひの米屋の娘、米屋娘はよい子でござる、よい子一番大阪で二番、カ
ゴで三番吉野で四番、江戸で五番の姉さんなれど、下に白無垢七色小袖、サラリ
〳〵と參詣を致す、町の若衆に引止められて、帶の切れたが放して下され、帶
の切れたがぬすばれん（結ばれぬ）ぬすばれん、丁度卸いて千衝いた。

○向ひ通られダコ娘、シホヤカクべの弟娘、セキダ穿かせて絹着せて、絹ではないもの布やもの、布の下から手を出せば、ヤレヤレなさけやかけどくない、親に三貫子に五貫、してオバマの四十五貫、四十五貫の金持は、高い米買て何にし船に積むて〻買ふわいの、高い小豆買て何にしる、船に積むて〻買ふわいの、船は何船關東船、關東土產に何買て來た、笹の葉のついた帷子一枚買て來た、誰に着しよて〻買て來た、オバアに着しよて〻買て來た、オバア死んでは今日は七日いッて見やれよ墓ついて、墓のめぐりに松植ゑて、千松ワガヤといふてトリヤレー、いうてトリヤレー。

○向ひの小寺を誰や建てた、八幡長者の弟娘、みめよし縹致よし姿よし、手にはネハンの玉を据ゑて、足には黃金の履穿いて、あゆべ〳〵と責められて、馬に乘

るかや、馬もいや〳〵、牛に乘るかや、牛もいや〳〵、テンカ女郎衆の御駕籠に乘りたや、乘りたや。

○あこへ見えるは鐵砲擊(獵人)樣よ、鐵砲かたねて大小差いて、上の羽織は誰や縫ふた羽織、おらはミッサン三日の仕事、三日仕事に手に豆や出來て、醫者も呼ばうか鍼醫者も呼ぼうか、醫者も鍼醫者も御免でござる、あした雨降りや肩休め、肩休め。

●同（四國波邊）

○紺屋の內儀のたはね髮、色染いだす何いろや、さいとつきよの水淺黃、しぶかや紋りや紺びろど、おくどやさら〳〵、鼠や鶯一とさりから二たさりまで、紺屋

の亭主のふつゝりばつゝり、色どつさん〳〵。

○金澤の宮の腰の、おせんさまが、手鞠上手で、上へあがりて、上で三千、城へ上りて、城で三千、ちんと打込む鞠太鼓、まりで一番權之助、二番松坂詰之助、三番横丁のお女郎樣、四番篠原お梅樣、五番紺屋の紋どころ、六番寺井で七郎どす、七郎と、七郎と八郎とかな横丁、横丁のおまへで管三つ拾つた、一つのくだではた織ならへ、一つのくだで糸とりならへ、一つのくだで小袖の小袴をぬひならへ〳〵。

○とん〳〵殿さま何所へ往きやる、大阪京都苧を買ひに、苧のよいがや地のよいが、たゝいて見たらばふかかと、しめて見たれば玄やん〳〵と、座敷に手鞠を置たのは、姉まにとられて腹が立つ、そのよに腹が立つかいな、錦や黄金を進上か

錦や黄金は、わしやいらぬ、伏見の客を貰らひたい〳〵。

○桶やお雛さん、ちよこさへ嫁に、ちよこさへ一番伊達衆でござる、五兩の帶買て三兩にくけて、くけめ〳〵により金おきて、立てば芍藥座れば牡丹、あゆむ姿は百合の花〳〵、すつとん〳〵〳〵と千ついた〳〵。

●同（禍波郡西山家）

○今度加賀さまがお江戸へおたち、御供まはりはたれ〳〵さまや、一に内膳二にかな長さま、三にささま、にちよーにかーよた、かよた御馬にことづけましよか、此度は深山山中なれど、ふでにことづけ、硯はもたず、さてはお茶屋におとまりなされ、橋のつめから二軒目の茶屋に、茶屋のかゝさまはおまんと申し、おまん可愛や、亙寒の冬は、つゝれ一枚肌着はもたず、丁度おろいて、千ついた千

ついた。

○己が父さは金山へ、一年たてどもまだ見えず、二年たてどもまだ見えず、三年三月に狀が來て、誰に來いとの狀ぢやいな、おはまに來いとの狀ぢやいな、おはまは今年はいくされぬ、來年はたちに成つてから、赤い小袖に七簞笥、黑い小袖も七簞笥、白い小袖も七簞笥、道具長持十二さし、是々仕立てゝやるほどに、去られて來うとは思やるな、出されて來うとも思やるな、さられて來うともおもはねど、男の心は秋のそら〳〵。

●子守唄（水橋町）

○ネン〳〵コロリン、ネンコロリン、泣くなや泣くなや雀の子、泣いたと餌差が連れに來る。

○ネン〳〵コロリン、ネンコロリン、アンニャのべーヤ（赤子の）何處いつた、山々越えて里いつた、里の土產は何ぢやつた、デン〳〵太鼓に笙の笛。

○ネンネヤコロ、誰がした、アンニャのべーヤ何處いつた、山々越えて里いつた里の土產は何ぢやつた、赤い椀にまゝ（飯）一杯、赤い皿にとゝ（肴）一杯。

○お月さんお月さんアンタは幾つ、十三七つ、嫁取つてへんぜう（進ず）嫁やまだ若い、メロ（女）ならへんつぶせ（踏つぶせ）男なら育てゝ赤いや籠にがら〳〵（鈴）つけて、ネンネヤコロ、ヤ。

●天氣天象の唄（富山市）

○いきやいゝのおばま、はなかみやおちた、へうてーんじ、なこならいやじやべッこ〳〵さッしやい。

○あらねやこん〳〵、ねや〳〵こん〳〵。

●一匁とせ（水橋町）

○一匁とせ、おら石割らんとせ、石屋のもんこそ石割れか。
○二匁とせ、おら庭掃かんとせ、奉公人こそ庭掃けか。
○三匁とせ、おら鯖すかんとせ、漁人どもこそ鯖すけか。
○四匁とせ、おら柴刈らんとせ、山のもんこそ柴刈れか。
○五匁とせ、おら碁打たんとせ、オヤッサマらち（親達様達）こそ碁打てか。
○六匁とせ、おら艪押さんとせ、漁人どもこそ艪押せか。
○七匁とせ、おら質置かんとせ、貧乏人こそ質置けか。
○八匁とせ、おら鉢割らんとせ、べしやらち（下女達）こそ鉢割れか。

○九匁とせ、おら苦せんとせ、貧乏人こそ苦せれか。
○十匁とせ、おら重持たんとせ、べしやらちこそ重持てか。

越後國

●方言歌（新潟）

○おどよそや（鶯）、初音ぶん出せ、聞くかんだ、啼かんと、そんな、捻り殺すぞ

●かそん〳〵（同上）

○かそん〳〵出て見そんせ、白山そんの浦そんに、お月そんが出そんした。

●追分節（同上）

○朝咲て四つに萎る〻朝顔さへも、思ひ〳〵の花が咲く。

○鳥ならば近き森にて巣をかけ置いて、焦れ啼く聲聞かせたい。

○櫓も擢も波に取られて身は捨小舟、何處へ取付く島もない。

●米山甚句

○飲めぬお前と知りつ〻注で、一と口助けたいサ、下心ミナヨ〳〵ミナ〳〵ー、ミナヨチヨイトミチサッサ。

○破れかぶれて濡れたる二人、さした傘からサ、洩る浮名、ミナヨ〳〵、ミナ〳〵ー、ミナヨチヨイトミナサッサ。

○子までである中引分られて、窶れ果てたるサ、干芋莖、ミナヨ〳〵ミナ〳〵ー、ミナヨチヨトミナサッサ。

●松坂甚句

○あたま剃ねへ、さきや鹽辛でもなぬたかゐまはくらゐすつたゐけ道樂どうしん坊。

●相間節（長岡）

○相間々々と木萱が靡くノウイ、靡く木萱にジッ花が咲くノウイ。
○相間よいとこだよ、女子衆のよばひノウイ、いやがる男はジッ憎まれるノウイ。
○相間中村の新街道が燒けるノウイ、寢て、金取るジッ其罰だノウイ。

●天神囃子（魚沼郡）

○天神囃の梅の花、一枝折りては笠にさし、笠にさゝうより島崎女郎衆の、手に渡さう。
○御門の上の鶯が、此の旦那樣、知行增せ〳〵と、さやづる。
○目出度い者には芋の種、ずいき長ふで葉を廣く、孫子さかよる。
○目出度い、此の御臺所、御釜七つ八つ、うしろに、倉が九つ。

○白かねちう子に、こがね臺、ついて廻れば、光りかゞやく。
○目出度い者には、大根種、花咲いて、みのりて、俵重ぬる。
○上から下りし、御山伏、手にはほらの貝、肩には瑠璃の玉ふさ。

●臼挽唄

○おらア臼サア、、山に三年、河原に二年ごろり、五年もねた臼だ、ヨイショ〳〵

●鳥追唄

○おらが裏の早稻田の稻を、なん鳥がまくら(食)つた、雀鳥がまくらッた、雀すはどり、たちアがれ(飛去)、ホーイ〳〵。
○あの鳥や何處から追つて來た、此鳥やどつから追て來た、信濃の國から追つて來た、何を持つて追つて來た、柴をのひで(投)、追つて來た、しばんとりも、ご

ばんどりも、たちャがれ(飛去)、ホーイ〳〵。

○あら誰が、とりひだう(鳥追堂)、から誰が、とりひだう、太郎どんの鳥追堂、かしら(首)切つて。しり(尾)切つて、小田原へ投ふり込んで、小田原へ席がな三途河の伯母御の臍の下へ納めたホンヤラホーイ〳〵。

○向山ぢャからこッから光る、彼れこそ蟻ごの媒介、中一軒御門徒、御門徒のはやり、いちまきにまき、さんまき櫻、五葉松柳、柳の下で、だんとう踏んで、誰に讀ませう、げんじよに讀ませう、げんじのなは、粟鳥へいどり(鶺鳥)、たちャがれ(飛去)、ホーイ〳〵。

●七夕祭

○七夕樣は來年御座るや、竹に短冊七夕丸よ。

○上町の七夕樣は、ほんに見らるゝかげもない。

○をづや尾花やコウカンカウ(鳳仙花)の花、夕どこは飛ぶヤラ散るヤラ。

●盆踊(新潟)

○盆だてがんに茄子の皮の雜炊だ、餘り盛りつけられて、鼻のてッこを燒いたとさ。

○しよんで來たよ梅干に紫蘇の葉、中の核まで眞赤でてッかでしよんで來た。

○押せ〳〵下の關までも、押せば新潟が近くなる。

○新潟戀しや白山さまの、松が見えますほの〳〵と。

●同(五泉町)

○三下り「帛の引ソーレイ帶して錦を着よとアリヤリンヤン〳〵思ひ〳〵のナツハ、アハナバ

儘になる ドヾンドンサアサヨイヤイナ引

○三下り「君は引ソレイナ三夜の三ケ月さきよアリヤリヤン〳〵肯にちらりとナツハヤ・ハアナハアハ見たばかりヨイヤイナ引 ドヾンドンサアサ

●同（長岡町）

○踊り來て踊らぬ奴は、子でも孕んだか親とでも來たか。

○新潟の後家あらためは、後家の數々八百三十八後家、そのな大將が相模屋の後家だ。

●同（草倉）

○盆だと云ふに踊らぬ奴は、何か仔細のあるであろ。

●おけさ節（新潟）

○おけさエーヤおけさ見るとて葦で目をついたよう、よしもよしだよヤレ生よし。

○十七島田さらし手拭ふわりとかむり、寺の大門すご〳〵行けば、寺の和尚はそれ見るよりも、こたへがられぬ、られないけれども和尚の身なら、呼ぶに呼ばれず、手に招かれず、崖の櫻でヤレ見たばかり。

○嵐荒浪よせては返す、寄せて返して又よせる。

○鶴を殺せし大罪人は、善知鳥安方では無い此南兵衛。

○竹の切口にしこたんこたんと溜りし水は、澄まず濁らず出ず入らず。

○鮎は瀬に棲む鳥ア木にとまる、人は情の下に住む。

●飯坂踊

○アーイヤ新潟の川のまんなかで、菖蒲さくとは、す（シ）はらす（シ）や、アリヤ

〜〜ウ。

●手毬唄（新潟市）

○べんかいどのかいべん水飲めば、べんが無ければ大阪までも、大阪仙臺うばアの娘とろか妹をとろか、娘嫌や〜〜妹も嫌や〜〜己らがいつけしよのお松がよかろ、お松とろうとてごりよばんかけて、かけだごりよばん叶はぬ時は、お伊勢七度熊野へ八度、下のお山へ九の度。

●同（新發田）

○おんぢよんちよばし、なんなんなかばし、年は十六、大振袖よりおけしなされや、おしげさなあされ、あんまりこいとも、人目があかる、奥の障子を細目に開けたら、お歯黒だら〜〜お白粉ちら〜〜、まんさい〜〜、嫁取りだつたら、案内

納めてこんない納て、お釋迦様は〜〜、赤いお衣を代用し〜〜、てゝしやれ〜〜昨夜いちごによばれて行たら、おだいのすひもの小皿の巻物、一杯おすゝれ、二杯おすゝれすうすれ、三杯目には名主の權兵衛様が魚が無いとて、腹を立てた、面目無いとて烏があがめ身よ投げた、はてな〜〜はて〜〜な、お父さんのおかげで、お母さんのお蔭で、やつこのすゝはきのーい、〜〜、まづ一丁貸した。

●同（柿崎）

○番頭さん〜〜木綿一反いくらする、三じよ三もん四十五もん、今ちとまかりかちやからかぼん、隣りのおばさん一寸お出、おらちやねつくるかいッた、さんくるかいッた、高田の小供衆、十二十三なつて太鼓ぶつやら、鼓ぶつやら春日山へ上つて、春日山のお笹の中に御堂が立つたか立たんか、三日のようじん四日の精

進見えるか見えぬか一寸かくせ。

○おえびす様大黒様、どつちの方から來ました、一にや俵をふんまいて、二にやにつこり笑つて三にや盃いたゞいて、四つ世の中よいように、五つ泉の湧くやうに、六つむんばく息災に、七つ何事ないように、八つ屋敷をたひらげて、九つ小倉をおつたつて、十でとつくりおさまつた〜。

○お一つ〜〜〜〜お一つかへして、お二つ〜〜〜〜お二つかへして、お三つ〜〜〜〜お三つかへして、お四つ〜〜〜〜お四つほすてんほおすてん、くわんくんで〜〜〜〜くわんでやれまへ〜〜〜〜やんなもおだしか、〜〜〜〜おだしか、みつきり〜〜〜〜みきつきもおさへり〜〜〜〜おつさもおねんがへしおねんがへし〜〜〜〜おねんもおつこへ〜〜〜〜

おつこもかきとしかにきとしぼつスイ〜〜〜〜もうも一俵、一俵二俵三俵四俵五俵のたはら、お俵おしかくおしかく〜〜〜〜おしかくおもんがへしおもんがへし〜〜〜〜おもんもおさらへおさらへ〜〜〜〜おさらへもお一わさお二わさお三わさ、お四わさお五つわさお六わさ、お六わさほすてんほうおすてん、たんたんたきみす、わすは蓮華の花見やれ、おんこへとつてもくいの、向のお山のあのふりばあさんが、咲いたかつぶんだか私しや知らぬ、おんこへとつてもくいの、とんきり〜〜〜〜とんきりかせばんかあせいばんよ。

●同（新津）

○一つがらがら、二つさんそのき、三つみゝづく、四つよたか、五ついづみだ、六つもんめんで、七つなんてんだ、八つやまぶき、九つことりで、十におさめて

やまつんぎりこつんぎり、江戸の姉さが、まつかの腰あげ、腰に七卷口十さんからから、また一つがらがら。

○そことうらの、こゝとうらの小田原紺屋の中娘、色白で、櫻色で目許に化粧して長崎庄屋に貰はれて、長崎庄屋は派手の庄屋で、金襴緞子で藍むら淺黄で、重ね〳〵て七重ね、八重ね重ねて、染めて、くらぬせ紺屋さん、庄屋の事なら染めてもやろ、しかッてもやろ、裾になに〳〵かたに何々染めてやろ、裾肩は梅のおりそめ中の緞子は、しやうぎ橋、しやうぎ橋から、ちよッきりこッきり勘定せば伊勢の街道の茶屋の前、茶屋のまいから二本こぎいて產んで來た、一つには乳をのましめ、二つに乳のくび放し初め、三つには手習させそめ、四つに學問させそめ、五つには糸をとりそめ、六つに其機織りそめ、七つには絹機織りそめ、八

つに錦おり初め、九つに請いて進めて、十に殿樣の愛妾と愛妾と。

●子守唄（長岡地方）

○ねんねの守は何所へ行つた、あの山越えて佐渡へ行つた、佐渡は四十五里波の道、風雨吹いても宿が無い、人の軒端で日を暮らす、かはいやかはいや蛙の子、憎くや〳〵鰊の子、泣いたら波の中へ入れられう、起きたらお馬に蹴られやう、ねんねん小坊ッちやん、龜の小坊ッちやん。そら又のつぺらぼう。

●寺入歌

○小坊主々々々山へ行けヤレ〳〵おッかな（恐怖）ヤレおッかな、去年なも行きたれば、烏と申す黑烏が（字を習ふを）彼方へ向きては突き、此方へ向きては突き（師匠に手を持ち字を教へらるゝ裏圖）どうもならず（如何にして も書かれず）隱山（雪隱）へ隱れた隱れた。

○小坊主々々何を言ふ、烏の烏がおッかなアか（烏が恐しくば）御師匠様に縋れ、成らない中からも（貧窮の中より）そんぼ（音信もの）は澤山ぢや、嘴突にはなさるまい、隱山へ隱れてあたら隙を潰すなッ潰すなッ。

●數へ唄（中瀨原郡新津）

○一ッ火吹竹風の出るたより、二ッ舟乘櫂棒がたより、三ッ味噌丸のいろの付くのがたより、四ッ夜なかの提灯がたより、五ッ醫者どんの藥箱がたより、六ッ婿どんのお嫁さんがたより、七ッ菜切庖丁俎板がたより、八ッ山伏の法螺の貝がたより、九ッ虛無僧の尺八がたより、十ォに德利酒肴がたより。

○一ッ火鉢で燒いた餅、二ッ福々ふくれ餅、三ッ美事の黃粉餅、四ッよごれた小豆餅、五ッいんきよ屋のかぶれ餅、六ッ婿さんの歸り餅、七ッ七種雜煮餅、八ッ

彌彦へあげた餅、九ッこゝらい配る餅、十ォにところの祝ひ餅。

●子買々々（新發田）

○子買々々、何買て養の、ことゞと饅頭とおこしの米よ「其蟲大毒だか、どの子が欲しい……。

●氷滑（海町）

○渡り渡りしやうや、庄屋のお嬶、芋煮て隱して、蕪煮て突出して、お糞放いておん臀た。

●同（中貝沼郡）

○しみ（凍）たかほい、しみね（不凍）かほい、しんばいごんぱいならがまほゞ〳〵

●天氣天象の唄

○雪もどーんどん、あなゐり(霰)もどーんどん、お寺の松の木に、いつそどんど一(一升五合)とまーれ止まれ。

○てんじやう(天空の事)見れば、煤のやうだ、した(地上)見れば、綿のやうだ。

(中蒲原郡)

○天上見れば灰だ、中見れば綿だ、下見れば雪だ。(新發田)

○ぽた〜降るなや、濱のかゝ泣くとや。(同上)

○霰こんこ、御寺の前に、一升五合たまれ〜。(同上)

○雪やこん〜、霰こん〜、お寺の梨の木にすつころこんととまれ〜。

日沒西天の紅なるを見て

○あらたが(あれは雖)べん(紅)だ、こらだが紅だ、向山のお仙が機へる紅だ〜。

虹のあらはれたるを見て

○あた頭に虹ぼうた。(新發田)

風を上げんと欲すれど風きな時

○風のさぶとん、ごんごんと吹てくやれくやれ。(同上)

○お太陽樣強つい、風の神弱い。(同上)

月を見て

○おつ月樣何年、十三七ッ、いばらの陰に、やゝ子產で居らすた、お萬にばしゐればお千が恨み、お千にばしゐればお萬が恨み、誰ねもばしゐねで烏ねばしゐで油買に遣たでは、油屋の前ね、すべつて轉で、油一升まがすた、其油どうした、犬皆嘗だ、其犬どした川中投だ、其皮どした太鼓に張た、彼方行てはどんどこど

ん、此方來てはどんどこどん。（同上）

○のう〜さま（月）どつち（何處）、いばらのかげて、幼女を抱いて、花摘んでござれ〜。（中魚沼郡）

○のゝさん幾つ、十三七つ、まだ年や若い、茨の蔭で、錢一文拾つて、飴買つて嘗めて、赤い坊生んで、お萬に負して、油買ひやつて、すんなめつて轉んで、油皆滴した〜。（高田）

●動物唄

○後の烏が先になつたら、鼓太鼓に扇一本呉れる〜。（新發田）

○烏々汝の山燒けると、早やう往つて水かけれ〜。（同上）

○烏々かんがらす、をばの家燒けるぞ早く往つて水かけろ〜。（中魚沼郡）

○後の烏前んなれ、前の烏後んなれ。（同上）

○烏々何處へ行く、三國山へ胡麻蒔きに、何石々々蒔いて來た、皿に三石蒔いて來た、三國山の女郎が、馬に乘つてはデン反り、牛に乘つてはデン反り、デン反りデン反りしたれば、小褄の小褄汚して、洗ひ川に洗ふて、流し川に流がして、留め川に留めて、絞り川に絞つて、糊着川に糊着けて、前に干せば恥かしい、裏に干せば日が照らぬ、テン〜手箱に入れたれば、鼠がチヨロ〜、鼬がチヨロ〜、皆喰てしもた、隣の叔母さん猫一疋借して呉りやれ、屏風の陰でニヤゴニヤゴ。（蒲原郡）

○おらツたりの烏と、隣りの烏、かしこい烏、田の邊廻ツて、田螺貝拾て、つゝ碎して見たれど、赤い絹が十二、白い絹が十二、十二の中に「愛しげな女郎が、

かねの足駄穿いて、かねの杖ついてからん〳〵と、來たとなふ、乳母々々、あれ何んだ、一ぎちやう二ぎちやう、三ぎちやう櫻、櫻の股に、こーやぐ建てゝ、七どん八どん幸三郎、鮠が漁れたら、てご持て來いてご持て來い。（中蒲原郡）

○善導寺の烏、お賽錢盜んで田端へ寄つて、肴買つて食べて、喉に骨突き立つた

お千水呉りよ、お萬水呉りよ、お千もやあだお萬も嫌あだ、炮烙鍋で、石なご積んで、ほゝ危ない所。（高田）

○鳶とろゝ、猫の飯こぼして父にしかられて、泣き〳〵拾た。（新發田）

○鳶とろゝ、藪の中へ糞こいて、搔いても、搔いてもかゝんないかゝんない。

○とんび（鳶）まへ（舞）〳〵、烏笛吹け、蝗飛ん出て、魚の頭になりやれ〳〵。（中魚沼郡）

○雁がん、棹んなれ。（同上）

○蝙蝠〳〵、下い落て糟喰て、又天上へ上れ。（新發田）

○こうもりこたろ、海へ出て水のんであがれ〳〵。（中魚沼郡）

○螢こい、こい、こい、行燈持て來い露くれつ。（新發田）

○螢こい、こい、こい、木金蟲くれつと。（同上）

○ほとらつこ（螢）〳〵、あつちの水は苦えで、こつちの水は甘えで、こい〳〵、こぶねの花くれる〳〵。（中魚沼郡）

○ほてら（螢）こー、來い〳〵、行燈持て來い、露くれる露くれる。（中蒲原郡）

○蝸牛、によ〳〵角だせ角出せ、角ださねば御寺の鎌に持て、ちよき〳〵しましよ、しましよ。（新發田）

○蝸牛〜、角出せ、汝が出せば我も出す。（中魚沼郡）

○蜂々ごめんだ、おらまら（我未だ）ぼゝ（赤ン坊）だ、ぼゝだ。（中蒲原郡）

○どんぼ〜（蛉）おらちや〜（己）の乳の疣にとまれ〜。（中魚沼郡）

○蛇へッび、晩に化けて來ると、七ッ（自分の年の數ないふ）の鋏ではさみ切るぞ。（同上）

●雜謠

○かごめ〜、田打ちに行かぬか、足がよごれる候、洗へ候、手がよごれる候、流れる候、すゝげ（菅）に、つかまれ候、手がきれる候、こぼれ候、きれがない候、藥つけん候、錢が無い候、貸せる候、濟され候。（刈羽郡）

寺の小僧を嘲弄する時

○寺の小僧が賽錢三文盜んで、鯛買ふて、食ふて、鯛の骨あたる、あたるぼたる

（中蒲原郡）

川へ小便する時

○川の神樣吾ちだ小兒だ〜。（中魚沼郡）

二人相竝んで小便する時

○二人小便ね猫化ねよーね。（新發田）

犬或は猫又は鼠等の死骸を見て

○飯食時思付ぬよーに。（同上）

雪中橇車を引歩を見て

○橇車橇車馬造らい、濱の妻だん袋。（同上）